

第3章

(実践編)

全国8ヶ園の実践園による事例

1. 青森よつば保育園（青森県 青森市）
2. 認定こども園 品川区立五反田保育園（東京都 品川区）
3. 新宿区立四谷子ども園（東京都 新宿区）
4. 村山中藤保育園「櫻」（東京都 武蔵村山市）
5. 馬場保育園（石川県 金沢市）
6. おおわだ保育園（大阪府 門真市）
7. のあ保育園（山口県 下関市）
8. 合志中部保育園（熊本県 合志市）

1

青森よつば保育園（青森県 青森市）

1. テーマ

小学校に引き継がれていく発達の連続性

2. 保育園名

青森よつば保育園

3. 執筆者

園長 只野 裕子

4. 園紹介

【所在地】 青森県青森市大字三内字丸山69番 4

【URL】 <http://www.ans.co.jp/n/yotuba/>

青森市は人口306,000人の本州最北端の中核都市です。市内には87か所の保育園があり、6,100名あまりの子どもたちが通園しています。

青森よつば保育園（以下、当園）は青森市西部地区にあり、定員60名に対して25%増しの園児75名が在籍する私立保育園です。保育園の付近には子どもたちの徒歩で30分以内に、青森県立美術館、三内丸山遺跡、そして保育園と道路をはさんで、青森市三内西小学校（以下、三内西小学校）、遊具の多い公園として沖館川リバーランド、青森市三内中学校があり、自然や文化施設など子どもたちの体験にも恵まれた環境にあります。



青森よつば保育園の先が連携している小学校です

始めに

近年、保小連携の必要性が問われるようになってきました。なぜ、保育園と小学校との連携が必要なのでしょう。また、保育所は、何をなすべきなのでしょう。

「保育所保育指針」が、平成21年3月に厚生労働大臣による告示となりました。このことは「保育所保育指針」が守るべき法令となったことを意味します。その第4章に小学校との連携が記載されており、子どもの育ちを支える資料として、保育所児童保育要録を小学校に提出することとなりました。保育園、小学校の両者において「子どもに関する情報の共有」が必要になってきました。

このような中、保育園において、「子どもに関する情報の共有」を計るために小学校とどのような連携をしているのか、また今後どうあらねばならないのか検証し、その方向性を示していきたいと思います。

連携先小学校の青森市内三内西小学校について

保小連携として取り組んでいる小学校は、道路をはさんで隣接している三内西小学校となります。三内西小学校の児童数446名（その内1学年88名）、1学年入学に際しては、18の保育園、幼稚園から入学して

おり、当園から入学する率は約70%です。

1. 保小連携の考え方 ―当園と連携小学校―

当園では、保育園の次の時代である小学生へ発達の連続性を伝えるのが使命であり、子どもたちが、夢、あこがれ、希望をもって小学校生活を過ごせるよう、保小連携の軸を

- 幼児と児童との交流活動
- 教員と保育士との交流活動
- 接続期のカリキュラム連携
- 情報の共有

と考えています。

小学校との連携のきっかけは、小学校の秋祭りの際、地域の関係施設の一員として町内の方々と、昔遊びコーナー、絵本・紙芝居の読み聞かせコーナー、折り紙コーナーを担当したことが始まりです。それにより、保育士は卒園児の成長した姿を見ることができ、会話をします。子どもの成長を目の当たりにし、また小学校の校内に入ることにより、小学校を理解する基礎になります。

これらのことは『(旧)保育所保育指針』13章 保育所における子育て支援及び職員の研修などの2.(2)に「地域活動は、市町村の保育担当部局や他の保育所など関係施設や機関とも密接な連携をとりつつ、地域における子育てニーズを把握し、それに基づいて実施する」とあります。

また、前述した平成21年施行の『保育所保育指針』第4章1(3)エ 小学校との連携に、「就学に向けて積極的連携を図るよう配慮すること」とあります。また第2章における子どもの発達の特性や発達過程は、発達及び生活の連続性を考えるのであれば、それは保育園生活をもって終了するのではなく、小学校へ伝えてこそ、子どもの成長へと繋がっていくものと考えます。

連携小学校の青森市立三内西小学校の考える「保・幼・小連携」基本方針は

- こだわらない（学年、進学先）
- できるところから交流・共同で指導（TT）・情報交換を行う

としています。

連携のねらいは、子どもたちが、安心して、はつらつとして、学校に通えるようにすることとなっています。

残念ながら現在でも一部ですが、小学校のクラス単位の集団活動において、私語や立ち歩きをして、一斉授業からはみ出してしまう新入学児がいると言われています。小学校に入学したばかりの1年生が学校の生活やルールに馴染めずに、こうした姿を見せる現象は「小1プロブレム」と呼ばれ社会的な問題として取り上げられるようになりました。子どもの発達の連続性から考えて、保育園の卒園時3月と小学校入学時の4月に高い段差があってはいけないのは必須です。それぞれのつなぎ目で、学びはどのように繋がっているのか、そこで段差となっているのは何かを明らかにしていかなければならないのです。

2. 小学校等との7つの事例

それではこれまでの各事例を7項目紹介しながら、その連携を考え考察していきたいと思います。

1－5 連携小学校との事例

6－7 研修での事例

1. 保育園での体験の伝達「小学校スタートカリキュラム」

平成21年3月に青森市西小学校校長が来園されました。保育園での歌や遊戯を見たいということで、卒園式の歌「思い出のアルバム」、お遊戯「チャンス」を披露しました。校長先生は、小学校に入学前にここまでできるのかと驚いておられました。(このように驚かれる事例は他園でも多々あり、小学1年生と5歳児のギャップを感じるシーンです。)

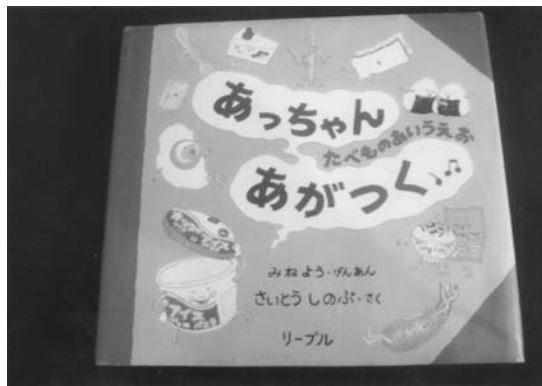
4月に入り、卒園児がよく歌っていた歌を知りたい、また、好きだった絵本を貸してほしいとの要望があり、以下の曲名を知らせ、また絵本を貸しました。

よく歌っていた歌

- | | |
|----------------|----------------|
| ○山のワルツ | ○かもつれっしゃのうた |
| ○ニヤニユニョのてんきよほう | ○しゃりしゃりしゃーべっと |
| ○アイアイ | ○さんぽ |
| ○おどろうたのしいポーレチケ | ○わらいかわせみにはなすなよ |
| ○ゴリラのおんがくたい | ○ゆきってながぐつ好きだって |
| ○銀ちゃんのラブレター | ○うたえ てのひら |

好きな絵本

- | | |
|-----------------|--------------|
| ○びっくりあそび しかけえほん | ○できるかな |
| ○おっぱいのひみつ | ○たんぽぽ |
| ○ぼく だんごむし | ○きよだいな きよだいな |
| ○ミッケ！ | ○あっちゃん あがつく |
| ○あぶないよ！ | ○きたないよ！ |
| ○ゆきのひの ゆうちゃん | |



保育園での体験の伝達と小学校スタートカリキュラム

小学校では、小学校入学時、穏やかに学校生活へ移行するためにスタートカリキュラムを1ヶ月間もうけています。スタートカリキュラムとは、保育所から小学校へ進む過程で、児童が、スムーズに学校生活へ適応していけるように編成した1学年当初のカリキュラムです。小1プロブレムが問題となっていることから、新入学児童が小学校へ滑らかな適応を可能とするために、保育園での遊びの活動を通した学びから、小学校での教科学習による学びにスムーズに移行させるために、生活科を中心として構成した合科・関連的なカリキュラムです。授業前、絵本の読み聞かせをすることで子どもたちの心を集中させたり、また保育園は違って、知っている絵本があることで共通の話題に発展したりします。また、授業の始めにスタート音楽と称して、手遊びをしたり、知っている歌を歌うことで、頭の転換ができ、共通の歌を知っているということで仲間意識も芽生えます。そのためには、保育園時代に好きだった絵本、聞きなれた歌が有効ということです。

2. 卒園児の来園事業

毎年行事として行っている卒園児の来園事業です。その目的は卒園児が来て小学校の楽しい話を在園児にしてくれたり、一緒に遊ぶことにより

○在園児が小学校に興味を持つ

○小学校の様子を知る

○小学生との交流

ということです。

平成21年7月27日、卒園児17名のうち12名が参加して行われました。

行事の内容は、ホールに2歳児～5歳までの在園児が集合、3月に卒園した卒園児への質問から始まり、小学校で楽しいこと、好きな授業、好きな給食を聞きその後、手遊び「一本橋」や「グーチョコキパー」を歌ったり、クラスごとのゲーム、全員でのフォークダンスなど、保育園時代の遊びで楽しい時間をすごしました。在園児はその後、給食となりましたが、卒園児はホールでスイカ割りを楽しみ、割ったスイカを食べながら、他小学校に行った友達とおしゃべりをしたり、保育士と小学校の話をしたりして、久しぶりの再会を楽しむことができます。

小学生と保育園児との交流で大切なことは、お互いが楽しい時間を共有し、またお互いから学びとると同時に、いわゆる保育の環境の中でお互いが人的環境となることであり、重要なことだと考えます。

3. 小学校2年生「まちたんけん」

小学校2年生の生活科の授業の一貫として「まちたんけん」の授業があります。その目的は、

○自分たちの町を探検し、いろいろな場所や物、人との出会いを通して、学区内の町のよさに気付く。

○きまりを守ってグループ行動をし、知りたいことをインタビューしてメモしてくる。

○自分の行った場所や出会った人、心に残った出来事などを絵や文、紙芝居、ペープサート、劇などで表現し、友達や家の人に知らせる。

となっています。

子どもたちが、多様な知識や経験をもつ地域の大人と触れ合う機会を増やすことは、学習や体験活動がさらに充実していくことであり、また、子どもたちの地域に対する理解や、ボランティアへの関心が高まり、生きる力が育成されるようにしていくのです。

保育園側の園児としては、小学生が来ることにより

○大きくなることへのあこがれをもつ

○精神的に成長しようとする気持ちの芽生え

○小学生と関わることで、小さい子への関わり方を学ぶ

ことができます。もちろん、前述した人的環境として重要性もあります。

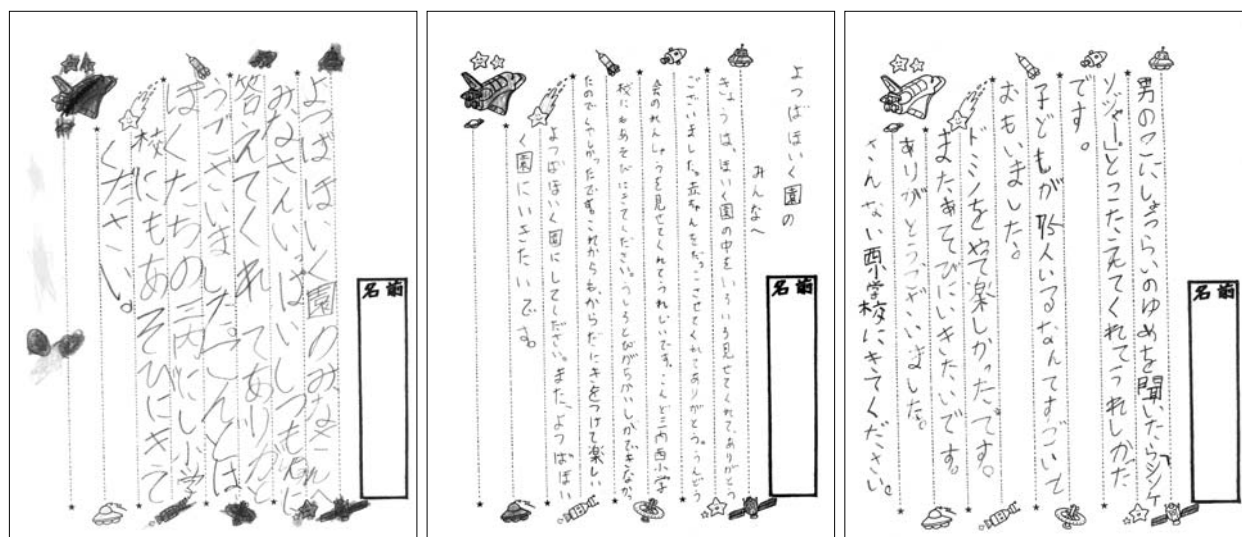
平成21年9月8日、午前9時より午前11時まで小学2年生5名が「まちたんけん」として保育園を訪れ、3歳より下のクラスと遊ぶことになりました。0歳児が小学生に抱っこしてもらったり、1・2歳児はおやつ時に口を拭いてもらったり、手遊びをしたり、また、自分たちができない縄跳びをする小学生を見てびっくりしたり、一緒にドミノ倒しをして楽しみました。後日、小学校から小学生の感想文が送られ（資料として添付）、今度は小学校にも遊びに来て下さいと書かれてあったのが次回への期待として印象的な言葉でした。



小学校2年生「まちたんけん」

小学生が「まちたんけん」として地域にある保育園を訪れ、園児と遊ぶ、そこから小学生は年下の子への接し方、いたわりの心を学び、園児は自分たちができないことができる小学生へのあこがれ、小学生が園児と接する時の様子から、小さい子への関わり方を学びます。小学1年生とは違う意義が、2年生の「まちたんけん」から良く理解出来ます。

小学生から送られた感想文



4. 保育園の運動会を小学校のグラウンドで

当園では園庭が狭いため、毎年、年度初めに小学校を訪れ、運動会のために校庭を借りるお話を校長先生、教頭先生に年度初めの挨拶かたがたお願いに行っています。また、運動会が近くなると、総練習のための校庭使用もお願いしており、小学校の授業に支障がないよう確認をし、練習もしています。

総練習の日、小学校正面玄関横の階段を降り、校庭に向かいます。この校庭にでる何段もある階段を上り降りする体験だけでも、園児には楽しく、保育園では体験できないワクワクすることです。今年は、トイレを借りた時間が小学校の休憩時間にぶつかり、園児が小学校4年生にトイレまで案内してもらったそうです。このように自然に園児と小学生との交流ができています。また練習時間は1時間30分くらいなのですが、どうしても小学校の休憩時間にぶつかります。すると校庭に小学生が出てきて、練習を近くで見てくれていたり、お遊戯や体操をまねて一緒にしたり、卒園児が声をかけてきてくれたりします。また先生方も校庭に出てきてくれ、練習の様子を見て励ましてくれたり、とてもありがたく思いました。

運動会当日、校長先生がいらしてくださり、0歳から5歳児までのお遊戯などを見てくださいました。かけっこなどの競技にはテント本部で校長先生にもお手伝い願い、賞の手づくりバッチつけをしてもらいました。小学校の校長先生につけてもらったということで園児も喜び、また校長先生が来てくれたということで、5歳児の保護者は小学校入学の期待を持ったようです。

意識して連携のための何かをするというのではなく、互いの行事の中で関わっていくこともできるわけで、保育園園児と小学生の自然な繋がりが出来ることが第一歩だと考えます。

5. 小学校の祭りへの参加（西小まつり）

冒頭で述べたとおり、小学校との連携が始まったのは、小学校の秋祭りに参加したことがきっかけでした。今年も10月4日「西小祭り」に参加協力しました。小学校PTA、三内児童館母親クラブ、小学校おやじの会の方々が参加され、軽食販売、リサイクル、手作り品販売、ゲーム、お化け屋敷等、盛りだくさんのメニューの中、当園では絵本の読み聞かせ、エプロンシアター等の協力をしました。日頃読んでいる絵本やエプロンシアターを見てもらうことにより、日常の保育を少しでも分かってもらえます。

保育園側としても卒園児の成長した姿を見ることにより発達の連続性を確認し、また地域の方々を知る機会にもなり、地域の中の保育園であることも再確認する場となると考えます。



小学校の祭りへの参加

6. 平成21年度青森市小学校教育研究会生活部会へ情報提供

青森市小学校教育研究会の生活科部会長（部会長が青森市立三内西小学校校長）より平成21年度夏季研修会の情報提供の依頼があり、お引き受けしました。7月27日（月）、研修会場である青森市立三内西小学校にて、青森市内の各小学校の生活科部会の先生方30人ほどが参加し、研修が行われました。研修のテーマは前述した「スタートカリキュラムについて」でした。

小学校側からの事例発表として「波打小学校のスタートカリキュラム 活用のポイント」及び新城小学校における「幼・小の連携について」の報告がありました。新しい学習指導要領が告示され、平成23年より完全実施、平成21年、22年は移行期となり、理科や算数など、この移行期に前倒しをすることで、確かな学力の定着がもとめられており、現場の先生たちの大変さが伝わってきました。

当園側の情報提供としては、一例として、各クラス毎日交代で、当番を決めて年齢に応じた手伝いを園児がしていることをあげました。

1歳児は保育士と一緒に園長室に挨拶にきて、ビタミンドロップをもらっていき、その時に挨拶の仕方を学ぶこと、2歳児になると、お当番バッジをつけてもらうこと、お当番として朝の挨拶時に紹介してもらうことです。2歳児にとって保育士の手伝いをすることが自慢であるようで、園長に嬉しそうに、「今日、お当番」と知らせにくる姿をみると、このころから手伝うことの嬉しさを知っているようです。

保育園は0歳から養護と教育が一体となった保育を行っており、5歳児になると、部屋の掃除の手伝い、給食の後片付けの手伝いができるようになること、遊びの中から、教育の5領域を学びとること、小学校1年生を0からの学びの始まりとするのではなく、その前の幼児期に培ってきたことも考慮してほしいことなど、事例をあげながら説明しました。

その後、先生方のグループ演習があり、1グループ7～8人程度で、スタートカリキュラムの作成をしました。各グループを回り、先生方と直接お話しできたことはとてもよい経験でした。保育園では当たり前のことが、小学校教師には理解されていなかったり、幼児期から小学校での教科学習による学びにスムーズに移行させるためのスタートカリキュラム作成の研修会を小学校教師の方々がしていることなど保育園側が知らなかったことなど、これらたくさんの取り組みがあることに驚かされ、お互いを知ることがこれからの保小連携の大きな鍵になると考えました。

7. 教職10年 経験者研修 社会体験研修依頼

青森県教育庁東青教育事務所の教育課長より「教職10年経験者研修・社会体験研修」の研修実施依頼がありました。実施期間は平成21年8月3日から5日までの3日間であり、研修目的は「教員生活に生かせる体験研修」とのことで、現役の青森県内の小学校教師が1名実習をしました。

1日目、2日目は3歳児のクラスにはいってもらいました。

1日目、朝の集会後、2歳から5歳児までがホールで行うグループに分かれての廃品を使つての作品づくりに参加してもらい、その後の給食も子どもたちと一緒に給食を食べてもらい、お昼寝とその後のおやつを食べる様子を見てもらいました。

2日目、折り紙製作ということで、おばけの折り紙をつくるということで、作業にはいる前に、おばけの

絵本「ねないこ だれだ」を保育士が子どもたちに読み聞かせるところを見てもらい、子どもたちもそれによってイメージがしやすいことを見てもらい、作業の補助をしてもらいました。

3日目、4・5歳児のクラスにはいってもらいました。

4・5歳児が園庭で育てている枝豆の葉や茎をポスターカラーで筆を使い描く様子を見てもらいました。4歳児は「どうやってやるの」と聞く子もいましたが、5歳児になると質問する子はいないなど、4歳児と5歳児の違いを見てもらいました。同日のお昼寝の時間に実習の教師と保育士との意見交換会を開きました。小学校の教師が保育園で実習して感じたこと、今の小学校の様子などを話してもらいました。（なお、実習に参加した教師の感想文を資料として添付します。）

保育士と教師との交流があまりないのは事実であり、とても良い機会がもてたと思います。これらが定期的に行われるということが大切ではないかと考えました。

10年経験者研修（社会体験研修）感想文

小学校

氏名

1 研修全体について

この度の社会体験研修で、私は青森よつば保育園にて保育士の仕事を体験させていただいた。

1日目の午後と2日目は3歳児クラスに入り、製作・給食・足洗い・寝かしつけ・おやつ・自由遊び等にかかわる仕事をした。3歳の子どもたちは、日頃私が関わっている小学生に比べ、とても小さくてかわいらしく、何でも手をかけてやりたい気持ちにとらわれたが、食事・排泄・着替え・脱いだ物の片付け・当番の子によるおやつの分配など実に多くのことを自分たちで行っていたのに驚かされた。主任の先生は「必要な時は手伝ってやりながらも、自分でできたときの喜びは大きいですよ。」と話して下さった。また、友達のまねをすることができるようになる…集団の力で育つ部分もたくさんあるとのことだった。保育士の方々は、子どもたちをその気にさせる声かけも非常に上手だった。（「すごい！〇〇頑張れば、フレッシュプリキュアになれるね〜！」など）こうした、「自分でさせる」「できるまで待つ」「必要に応じて手を貸す」「やる気にさせる魔法の言葉」というのは、私自身行ってきたつもりだったが、いかに大切で効果的なことなのかを改めて見直すことができた。

また、保育士の仕事を間近で拝見して感じたことは、子どもを預かる側としての責任を重んじているということだった。集団で自由に遊ばせるとき、多くの子に目を配る。ひっかかり傷を見つけたら、どうしたのか理由を明らかにする。顔が赤いなど様子に変化があれば、即検温…。子どもたちの体調にとっても敏感だった。体調にかかわることだけでなく、汚れて着替えた物のこと、できるようになったことなど、子どもたちが自分で言えない分、連絡ノートに書くなどして伝えていた。受け持っているすべて子どもの様子を伝えるために、担任の先生は休憩時間も惜しんで、午睡する子どもたちの傍らでノートを書いている…。保護者に対する説明責任を大事にされている姿を見習いたいと思った。

3日目は、4・5歳児（混合保育）クラスに入った。年長の子どもたちは、製作や給食で使う重いテーブルの出し入れや、給食の配膳、午睡のための布団敷きなど、担任の先生を助けどんどん自分たちで行っていて、とてもたくましかった。

この日の午後、園児たちの午睡の時間を使っていただき、保育士の方々と幼・保・小の連携にかかわるミーティングをした。以前と比べて、保育の世界にも「養護」だけでなく「教育」の要素が必要とされ、そのために年齢に応じた細かな「保育課程」が作られている。保育園側として小学校側に伝えたいのは、「1年生＝0（ゼロ）」とせず、0歳からの発達の積み重ねやつながりを大切にしたい。「運動会など大きな行事で、6年生と1年生に同じような行進をねらうのではなく、それぞれの段階を意識して欲しい。」ということだった。園児たちの生活ぶりを見て、1年生も小学校生活のシステムさえ覚えれば、当番活動なり学習なりどんどんチャレンジさせてよいのだと感じた。

3日間の保育園での社会体験研修は、ここに書ききれないほどたくさんの発見や刺激があった。これらを今後の仕事に生かしていきたい。

多忙中、研修生を受け入れて下さった保育園の先生方、そしてこうした貴重な体験の機会を与えて下さった事務所の先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

これら 1－7 の事例からわかったことは、保育園と小学校の連携が求められているのは、保育園から小学校への移行がスムーズに行われていないに加えて、お互いを理解していないという現状があるからです。それを対処するために、情報の共有、園児と小学生の交流が求められてくるのです。そして保育園自らがその小学校との壁をなくす努力をするべきだと思います。

3. 青森県教育委員会 「幼・保・小連携推進事業 ワーキンググループ員会議」

青森県教育委員会では平成20年度より、「幼・保・小連携推進事業 ワーキンググループ員会議」を年4回開催しています。この会の目的は、学校教育法等の改正により、幼児期から児童期にかけての発達や学びが円滑に接続していくよう、幼稚園、保育園と小学校との連携が求められている中、どのようにすれば子どもたちが、小学校生活にスムーズに溶け込むことができるのかを話し合い、実行していくか検討するための会議です。グループ員のメンバーは幼稚園関係者3名、保育園関係者3名、小学校関係者3名、それに事務局として教育委員会から1名参加の10名で構成されています。尚、筆者である青森よつば保育園園長、只野も保育園関係者として参加しています。

幼・保・小連携推進事業ワーキンググループ員会議では、幼・保・小連携推進取組プラン（リーフレット）の作成に協力、配布先は青森県内、小学校（352）、小学校１年学級（541）、市町村教委（41）、教育事務所（6）、県総合学校教育センター（1）、幼稚園（132）、幼稚園５歳児学級（178）、保育園（471）、保育園５歳児学級（471）、ＰＴＡ連合会（20）、庁内関係各課（87）となっており、幼・保・小連携推進取組プランの活用状況について情報交換しながら、その成果と課題を明らかにするとともに、学校及び保育現場等で今後どのようにプランを活用及び普及していくかについて協議し、幼・保・小連携の推進を図っていきます。

平成21年度の会議の内容は

- | | | |
|------|--------|--|
| 1 回目 | 6 月25日 | 青森市立三内西小学校見学
教育活動の見学及び幼・保・小連携に係る話し合い |
| 2 回目 | 7 月30日 | 幼・保・小連携推進取組プラン（案）の検討
○年長児の取り組みについて
○小学校の取り組みについて |
| 3 回目 | 8 月18日 | 幼・保・小連携推進取組プラン（案）の検討
○年長児の取り組みについて
○小学校の取り組みについて |
| 4 回目 | 9 月15日 | 幼・保・小連携推進取組プラン（案）の検討
○年長児の取り組みについて
○小学校の取り組みについて
連絡協議会への提案及び今後の予定 |

以上です。

1 回目の市内小学校見学が当園の連携先である青森市立三内西小学校であったことは、とても幸運なことでした。

教育活動の見学として、

○給食の準備、給食活動、給食の後始末

○清掃の準備、清掃活動

を見学しました。

小学生と直接話すこともでき、給食当番の様子、学年縦割りグループの掃除、掃除反省会の様子を見学しました。

2 回目以降の会議では、前年度から話し合われている、幼・保・小連携推進取組プラン（リーフレット）の作成会議が続きました。

掲載内容は、

○幼・保・小連携推進取組プラン（リーフレット）を作成することになった経緯やねらい

○「幼稚園・保育所（園）」から「小学校」へ進むときの子どもたちの気持ち

○「幼・保・小連携」の例示

- ・ 幼児と児童の交流
- ・ 教員と保育士の交流
- ・ 情報交換や意見交換など

○幼・保・小の連続の必要性について

○「幼・保・小の接続を意識した取組プラン」の例

- ・ 幼稚園や保育所（園）では
- ・ 小学校では
- ・ 幼児と児童の交流プラン例

○教員と保育士との交流プラン例

○Q & Aで知る幼稚園・保育所（園）・小学校における教育・保育、幼・保・小連携推進

- ・ 幼稚園は何をすることですか？
- ・ 保育所（園）は何をすることですか？
- ・ 幼稚園教育と保育所保育の違いや共通するところは何ですか？
- ・ 幼・保・小連携の目的は何ですか？

○幼・保・小連携に係る記載事項

- ・ 幼稚園教育要領
- ・ 保育所保育指針
- ・ 小学校学習指導要録総則
- ・ 小学校学習指導要録解説 生活科編

この「幼・保・小連携推進取組プラン」（リーフレット）は平成22年度には完成予定です。

このような会議に参加することにより、いかにいままで小学校教師との話し合いがなかったり、お互い

の情報交換がなかったのかを再認識させられます。

たとえば、はじめの「幼・保・小連携推進取組プラン」（リーフレット）作りの中で「待つ保育」という言葉がでてきました。待つとは、誤解される言葉で、「なにもしないで待つ」という意味として受け取られてしまいます。「保育所保育指針」第2章・子どもの発達の中で、「子どもの発達の特性や発達過程を理解し、発達及び生活の連続性に配慮して保育しなければならない。その際、保育士等は、子どもと生活や遊びを共にする中で、一人一人の子どもの心身の状態を把握しながら、その発達の援助を行うことが必要である」と書かれています。このことは決して「(黙って) 待つ保育」をしているのではないのです。それを会議の中で説明し、「待つ保育」という言葉を削除してもらいました。このように保育所保育が誤解されていることがたくさんあるのです。このことから、保育所は、0歳児から養護と教育の一体による保育を行っているという点を小学校にまだまだ説明できていないのだと痛感しました。

またこの会議の中でも、5歳児としての保育園での3月と、小学1年生としての4月では、あまりにも扱われ方に段差があることが話し合われ、保育園側が積極的に子どもの育ちの連続性を小学校に伝えていかなければいけないことを考えさせられました。

4. まとめ

今、なぜ保育園と小学校との連携が必要なのでしょう。

それは、子どもの発達や学びは連続しているにもかかわらず、幼児期の教育と小学校教育では、発達の特性から教育内容や指導方法が異なっているからです。極端な言い方をすれば、幼児期は遊びの中から全てを学びますが、小学校は学習が中心です。その切り替えがうまくいかなければ、小学校生活についていけない子どもがでできます。また、今の社会では異年齢の子どもの集団が形成しにくくなるなど、地域で遊びを通して交流する機会が減少しているなどの社会の変化、家庭の教育力の低下などが背景となり、学校での生活の変化に対応できにくくなったこともあげられます。

保育園は、今 何をなすべきなのか

「保育所保育指針」に書かれてある発達の連続性を考えれば、小学校に子どもの発達を繋いでこそ、保育園の役目をはたすことになり、いかに子どもが幼児期で、いろいろなことを遊びを通して学び、また自分の力で行動できるのかを小学校に伝えていかなければならないのです。

当園における小学校との連携は、始まったばかりの少ない経験で反省すべきことは多々ありますし、これらを改善しながら進めていかなければならないことは、たくさんあるのだと思います。例えば、

- ① 保育の時間の中で、学校の授業、休憩時間の中で園児と小学生が交流できる場をつくっていくこと
- ② 保育士・教師の指示で行動するのではなく、園児、小学生が自分たちから言葉がけをしたり、会話できる場をもうけること
- ③ 教師と保育士の話し合いの場をもうけること
- ④ 1日体験として、教師・保育士がお互い学校、保育園を見学すること

- ⑤ 保育園「園だより」、小学校「学校だより」を交換すること
- ⑥ 5歳児の学校見学
- ⑦ 保育課程 他資料の交換（要録提出）

が考えられます。

具体的なことが、進められていき、保育園と小学校との交流が当たり前のこととして、何か大きなことをしなければならないと考えるのではなく、自然に行われていくことを望みます。

しかし、現在はこれらのことを意図的に進められることが第一義なのだと考えます。それが、幼児期から小学校へスムーズに発達の連続性を伝えることとなり、子どもたちが夢・あこがれ・希望をもって小学生生活を過すことに繋がります。子どもに関する情報の共有としての「保小の連携」が保育園の時代を次代へ繋ぐ使命の大きな架け橋になると考えます。

和田信行研究員からのコメント

青森市の事例を視察する機会に恵まれました。青森市立三内西小学校とよつば保育園の連携の良さを直接感じてきました。近くの三内丸山遺跡同様、多くの関係者に広めていきたい事例でした。

その一番の理由は、小学校長と保育園長の相互理解です。小学校長は保育園との連携の必要性を強く感じていました。また、保育園長も小学校との連携の重要性を強く感じていました。この二人が、まさに意気投合した感じがしました。

(1) 小学校生活科を連携の核に

小学校の校長は、青森県の小学校生活科・総合的な学習の時間教育研究会の代表をされています。生活科が保幼小の連携や接続の核になる必要性について、実践を通して県内に広めています。小学校スタートカリキュラムと保育園での入学準備カリキュラムが接続すると、子どもにとっての成長や学びの連続性につながっていきます。

(2) 保育園からの積極的な働きかけ

小学校とは歩いて数分の距離で、子どもたちもほとんど卒園すれば三内西小学校へ入学します。保育園からは、運動会を小学校の校庭で行ったり、小学校の祭りに参加したりと、日常的に先生方の相互理解が進んでいます。

組織のリーダーの必要性の認識やリーダーシップの在り方を学ばせていただきました。

2 認定こども園 品川区立五反田保育園(東京都 品川区)

1. テーマ

滑らかな接続のために ―品川区の取り組み―

2. 保育園名

認定こども園 品川区立五反田保育園

3. 執筆者

園長 櫛田 薫

4. 園紹介

【所在地】 東京都品川区東五反田 2-15-6



JR大崎駅から徒歩5分、超高層マンションとオフィスビルに囲まれた一角に五反田保育園があります。昭和51年に開園し、産休明けからの子ども110人が朝7:30～夜10:00まで過ごしています。

大半の子どもが長時間保育を必要とするので、0歳児から2歳児は子どもの学年齢にこだわらない少人数のグループ(7)に分け、個人差に対応したきめ細やかな保育をしています。

開園時には中小の町工場が多く、保育需要は比較的低い地域でしたが、市街化再開発とマンションの建設で保育需要は高まり、現在は定員の弾力化でしのいでいるものの、待機児童の解消が大きな課題となっています。

また、併設のデイサービスも大きな特徴です。72歳から100歳までの人生経験を十分に積み上げた方たちと、毎日食事、おやつの時間をともに過ごし、行事もすべて一緒に行うことで、子どもの心に優しさや思いやりが芽生え、高齢者は自分の存在価値を再発見して暖かな気持ちになれる事業です。

そして、平成19年9月から「保育園型認定こども園」へ移行し、「0歳からの学び(育ち)の連続性」を大切にした就学前教育の取り組みが始まりました。

1. 保幼小の連携

区の就学前教育の方針は「就学前の乳幼児が保育園・幼稚園や在宅にいても等しく教育保育を受け、小学校へスムーズに移行すること」です。

○平成14年就学時連絡会の発足

「保幼小のなめらかな接続」のために教育委員会と行政、保育園・幼稚園の園長、校長の代表による話し合いが持たれました。その中で、公立幼稚園からは幼児指導要録で接続できるのですが、保育園にはなく、必要な情報を伝える場がないことを何とかしたいと話しました。

翌年、就学時連絡会を全校が実施しました。学校にとって10～20園との対応は時間的にも大変だったと思いますが、ただ、子どもの情報を共有化するだけでなく、職員同士が知り合い理解する大きなきっかけになりました。子どもの情報を伝える術を持っていなかった保育園と小学校につながりが出来ました。

○平成17年公私立保育園、幼稚園の管轄窓口が保育課に一本化

公立保育園と幼稚園の施設長会も組織化されました。このことにより、相互の制度・文化の違いが見え、保育園・幼稚園の保育者がこれまで培ってきた保育の内容や実践について伝え合う機会が多くなりました。公開保育を経験し、カリキュラムの検討もしました。

○平成18年リーフレットの作成

それまで大切にしてきた保育園・幼稚園それぞれの文化や実践方法、カリキュラムなどを丁寧に論議し、「品川のすべての子どもたちに、等しく、質の高い教育・保育を提供する」ことを目的に、リーフレット「就学前の一貫した教育・保育を目指したプログラムの開発」を作成しました。保育園・幼稚園の保育者たちは、就学前教育に保育園・幼稚園に違いはないと確認した上で共に開発に関わり、保育現場で活用されるものになりました。

○平成19年「のびのび育つ しながわっこ」の編纂

小学校の教諭も交えて冊子を編纂しました。これは、生まれてから小学校低学年までの子どもの成長を見通し、「生きる力」をつけるための、保育指導案や環境構成などを盛り込んだ100頁を超える冊子です。

この中で、区の就学前教育の理念が明確に宣言され、「0歳からの教育」という概念が保育園の中で、きちんと位置づけられることになりました。そして、地域の小学校との連携(交流)が全区的に拡がりました。当園でも、近隣の2小学校と学校訪問や給食体験、出張授業などを通じて関わりを深め、子どもには就学に向けての安心と、保護者には小学校への信頼感が生まれました。

○平成21年「保・幼・小の連携に関する検討委員会」の設置

学識経験者を始め、公私立保育園長、幼稚園長・小学校長・行政・教育委員会が、「保育園・幼稚園および小学校の推進に関すること、就学前教育の充実に関すること、入学時の小学校教育に関すること、就学前教育と小学校教育の円滑な接続および交流に関すること」を検討し始めました。作業部会では、保育者と教諭が接続することの大切さを感じながら、旺盛に議論を深めているところです。

2. 交流の始まり

平成19年度21校（33園）でモデル実施された交流のねらいは、

- ・年長児が小学校の就学に向けて、自然な形で学校環境に慣れ親しむ機会を提供する。
- ・小学生が年長児と日常的に接することにより思いやりの心を学ぶ。

- ・学校側が将来の児童の現状を知り、また保育園・幼稚園側が子どもを託す学校環境を理解し、相互理解形成の機会とする。

です。

園児向けが214回、職員向けが59回、保護者向けが15回実施されました。主な内訳は、授業見学や体験、給食交流、作品展の出品、交流遊び、公開授業、栽培活動などです。

1校あたりの平均で13.7回の交流があった計算になります。このことから、小一プロブレムに対する関心が、現場では非常に高いことが分かり、就学前の時期に小学校の生徒や学校、教職員と触れ合う機会をつくる事で大変良い効果が得られると検証できました。

交流の効果を実感した翌年からは、全小学校と保育園、幼稚園（公私に関わらず）に広がり、地域の特性や状況に応じた連携が図られるようになりました。

3. 五反田保育園の交流事例

認定こども園になってから、退職校長による保育の巡回指導が行われるようになりました。外部講師による園内研修の機会に恵まれたのです。

その中で、保育園の領域別指導案の下、とことん遊ぶ中で学ぶ子どもの姿を、小学校の着席中心の教科学習の中で学ぶ姿にスムーズに接続させるために、日常の保育が学校生活の「どことどうつながっているか」を常に考えて環境を整えることの大切さを学びました。

区の流れが連携を図る方向にあっても、実際には現場の考え方で連携の密度や達成感は異なり、保育園から積極的にアプローチするよりも、学校から声がかかるのを待つ、いわば学校次第の意識もありました。しかし、交流すれば必ず学びがあり、保育に広がりが見通しがもてたことも事実です。交流を一過性のイベントにしないで、どう保育に生かすか、保育園側の学校理解と学校側の幼児理解があってこそ、保小の連携が本物になると確信できました。

御殿山小学校は、1学年2学級、敷地内に幼稚園を持ち、校長が園長を兼任しています。

私たちは、まず幼稚園との交流を重ねながら、小学校とのつながりを深めていきました。

当初は、行事のお誘いや公開保育の参加に限られていましたが、今では一年間の見通しを持って、主体的に関わる事が出来るまでになりました。

一方の日野学園は、品川区で一番初めに小中一貫校になった新しいスタイルの学校です。1学年3学級で1年～9年生までが過ごしています。温水プールや広い廊下、ランチルームなど近代的な6階建ての校舎も子どもたちの憧れです。

御殿山小学校との交流事例（保育園カリキュラム）

「小学校の給食をたべてみよう」

- ねらい
- ・今回の体験を就学の期待につなげる
 - ・保育園給食との違いに気付く
- 日時 平成19年6月26日(火) 12:30～13:30
- 場所 御殿山小学校家庭科室



	計 画	実 態
事 前	・小学校の給食を食べることに期待が膨らむよう、メニューを知らせ話題を提供する（スパニッシュオムレツって何？） ・学校はどんなところだったか、前回の経験を思い出してみる（廊下の歩き方、靴の履き替え方、体育館の大きさなど）	・メニューに因んだ話題を共有することで、関心が高まった（スペインを図鑑で調べたり国旗を見つけたりした） ・自分で身支度を整えよう、しっかり返事をしようなど、「学校へ行く」緊張感のなかで動機づけできた ・前回の「運動遊び」の様子を思い出して挨拶の言葉などを考えた
事 後	・交流して楽しかったこと、嬉しかったこと、驚いたことを自分の言葉で表わす ・就学へ期待が膨らむように一人ひとりの思いを受け止める ・御礼のメッセージカードを作成して学校に届ける	・栄養士に指名されて感想を言えたことで誇らしそうな表情を見せた ・翌日、4歳児に経験を話す場を作ると「トイレに窓がある」「迷路の工作があった」「小学生はかっこよかった」など感じたことを伝えていた ・下足から上履きへの履き替えは慣れないためか、座って行う子どもが多かった
学 び	・校内見学をしたことで、子どもたちの小学校に対するイメージがより具体化できた ・子どもの就学に対する不安が期待に変わり、保護者にも喜ばれた ・教師の指導方法を保育に重ねあわせることができた ・保育園から小学校へのつながりかたを確認できた	

「つくって あそぼう」

1 学年担当

1. ねらい

- ・年下の保育園児と交流し、お世話をする事で、上級生としての気持ちを一年生に意識させる。(市民科)
- ・年下の子にどのように接したらよいか考えさせる。(市民科)
- ・木の実や落ち葉を使ったものを一緒に作ることで、自然に親しむ態度を育てる。(生活科)

2. 日時 平成21年12月4日(金) 10時30分～13時00分頃

3. 会の流れ

- 10時20分～ 玄関前でお出迎え
- 10時30分～ 顔合わせの会 ・はじめの言葉
・グループ紹介・顔合わせ
・時程の説明 ※前半と後半に別れる。
- 10時45分～ ◎学校案内…スタンプラリー形式ではんこを押して回る。
①保健室 ②職員室 ③音楽室 ④メディアセンター ⑤ランチルーム
◎秋の工作…マラカス作り

時 程	A グループ (年中児)	B グループ (年長児)
10:45～	秋の工作	学校案内
11:15～	学校案内	秋の工作
11:45～	いっしょにうたおう・えんそうしよう	

- 11時55分～ 給食準備(給食当番のみ) その他はトイレ休憩
- 12時00分 ランチルームへ移動
- 12時55分 ごちそうさま
- 13時05分 片付け終了
- 13時15分 さよならの会 ・おわりの言葉
2階玄関まで案内する
- 13時25分～ スロープまで見送り



4. 指導計画

時	教科	学習活動	指導内容
1	市民	「やさしいまなざしで」で年下の子やお年寄りなどへの自分の接し方を振り返り、よりよい接し方を考える。	・相手に応じた接し方ができるようにする。 ・2年生になったときの自分の姿をイメージさせる。
2	市民	保育園児との交流の準備をする。	・グループ分けをする。・名札を作る。 ・誰がどの場面で説明やお世話をするのか、相談する場を設定する。
3	生活	マラカスの作り方を知り、作ってみる。	・作り方や、自分たちで用意する材料の確認をさせる。
4	生活	学校案内の仕方を練習する。	・ポイントを確認する。 ・自分たちで行く順番の通りに練習する。 ・誰が、どこで説明するのか確認する。 ・ランチルームでの座席と動きを確認する。

5. その他

- ・園児一人に1年生が2～3人つく。
- ・グループは1組～3組が混ざるようにする。
- ・学校案内では、担任は何箇所かポイントに立つ。
- ・マラカス作りの材料を11月中に用意しておく。

6. 分担

保育園との連絡・全体計画……………石川
 グループ作り計画・メンバー表作成……………橋本
 スタンプラリー台本カード作成……………大竹
 スタンプ回収……………大澤
 マラカス材料準備……………1年担当

※確認事項：インフルエンザの流行状況や欠席児童の数により、ランチルームでの給食が中止になる場合もある。

※見送りの時間が昼休みと重なるが、B週のため、5～9年の玄関は使用可能。

※ランチルームから5～9年の玄関までは、紫階段で移動する。

平成21年度 保・幼・小連携年間カリキュラム（五反田保育園・御殿山幼稚園・御殿山小学校）

五反田保育園の保育理念

- ・認定子ども園のよさを生かして、0歳児から就学前までの発達（学び）を踏まえた保育・教育を提供する
- ・保幼小の連携を図り、スムーズに就学できるように子どもの姿を共有する

5歳児交流のねらい

- ・学校での授業や給食を体験し、学校入学後の生活に期待をもつ
- ・学校は楽しいところであるが、遊びに行くのではなく勉強をするところであるということを、実際に体験することで認識する

年間カリキュラム

日時		内容	場所	備考
4月	17(金)	年間予定確認	保育園	保幼小
5月	22(金)	給食体験	学校	幼稚園と交流後
6月	24(水)	お店屋さんごっこ	保育園	
7月	2(木)	夏まつり	保育園	
	10(金)	ごてんやま祭りに参加	学校	
	15(水)	サマーフェスティバル	幼稚園	
10月	21(水)	授業体験（音楽）	幼稚園	終了後幼稚園と交流
11月	10(火)	授業体験（図工）	幼稚園	幼稚園と合同で図工教諭の授業を受ける
	20(金)	学習発表会見学	学校	
2月	16(火)	昔あそびの会参加	学校	
	26(金)	授業体験（5年生） 給食体験	学校	幼稚園と合同

4. おわりに

品川区の保幼小の連携は、子どもの育ちをトータルに見つめ、小一プロブレムと言われるギャップを少しでもなくすために、子どもの教育に関わる人たちの手つなぎをバックアップする行政の支えがあったからこそ実現したと思います。

交流を通じて、子どもの姿にも変化が見られました。「保育園で上履きを履くようにしてから、昇降口で下足から上履きへの履き替えがスムーズになった」「しっかり聞くことを重視した保育が、授業への集

中力を高めた」「学校体験が、学校が未知の世界ではなく、親しんだ校舎に登校できる安心感につながった」などです。

それは、小学校の教育を先取りすることではありません。保育園と幼稚園の制度の枠組みを超えた柔軟な交流を基礎に、小学校との連携を図り、知っているようで知らなかった「小学校で大切にしていること」を理解し、子どもの育ちを共有化することです。

所管省庁の違いだけでなく、それまでの文化の違いを越え、高かった垣根を低くするためには、お互いによく知り合うこと、実際に何かに取り組むこと、そして何より「子どものために繋がろう」という強い信念と受容の気持ちを持たなければ、言葉だけの交流であり連携であったと思います。

保育園でも幼稚園でも、小学校でも、それぞれの役割をきちんと認識して、「子どもの最善の利益」を基本に、本当の意味での連携が図れたなら、地域の中で子どもを見守る力も大きくなります。風通しが良くなることで、子どもと保護者に安心感も生まれます。

これからも、保幼小のスムーズな連携で子どもの生きる力をつなげて行きたいと考えます。



和田信行研究員からのコメント

品川区の特色は、何といても行政の強力な推進力でしょう。平成17年に公私立保育園と幼稚園の管轄窓口が保育課に一体化されたことが大きいでしょう。それまでの就学時連絡会の活動や校長会、園長会の話し合いや問題提起が背景にはあります。このような歴史的な経緯を踏まえ、現在の品川区の公私保幼小の連携があるのでしょう。

特に、現在行われている「保・幼・小の連携に関する検討委員会」では、就学前の教育・保育と小学校入学後の教育の接続カリキュラムを検討しています。「ジョイント期」と品川区では命名していますが、この委員でもある園長からの今回の保小連携の実践報告から多くのことが学べます。

(1) 区全体でのモデル実施から

19年度には、小学校21校と保育園・幼稚園33園が交流活動を行っています。1校あたり13.7回の交流があったそうです。行政の支援がなければなかなかできないことでしょう。

(2) 年間カリキュラムの作成から

五反田保育園・御殿山幼稚園・御殿山小学校で21年度の保幼小連携のカリキュラムを作成しています。年度計画に保幼小の連係がしっかりと位置付けられていると、それぞれが見通しをもって進めていくことができます。

3

新宿区立四谷子ども園（東京都 新宿区）

1. テーマ

小学校との複合施設を生かした連携教育の実践

2. 保育園名

新宿区立四谷子ども園

3. 執筆者

園長 國嶋 高子

4. 園の紹介・特色

【所在地】 東京都新宿区四谷 2 - 6

【URL】 <http://www.city.shinjuku.tokyo.jp/division/559200yotsuya-ku/index.htm>

東京都で公立第1号の認定こども園として平成19年4月に開園しました。小学校併設の公立幼稚園2園と公立保育園1園が統合、小学校も2校が統合し子ども園と小学校の複合施設として新設されました。子ども園は、0～5歳児の一貫した保育・教育と子育て支援事業を行う施設です。園児は0歳～5歳児8クラス162名、職員は28名、非常勤16名、その他給食調理や用務の民間委託の社員が勤務しています。

園児の一日の生活は開園7時半から20時半までの中で、0歳～5歳児の長時間保育（就労時間により保育時間を決定）の子どもと4・5歳児には短時間保育（9時～15時）中時間保育（9時～16時半）の子どもがいます。保育士は0歳～5歳児を担当し、幼稚園教諭は保育士とともに4・5歳児を担当しています。いくつかの特色ある教育活動として、0歳から5歳児の一貫した保育・教育を目指す中で、子どもの生活の流れと発達や学びの連続性を大切にした保育・教育と、四谷小学校との連携教育の大切な取り組みがあります。



1. 連携の考え方 ―子ども園と四谷小学校―

統合の前身、四谷第三小学校と併設の幼稚園が平成18年度幼小連携教育の研究発表を行った経緯もあり、小学校が平成19年度に新校としてスタートしてから2年目に、さらに深めるための連携教育推進の研究発表を行うことになりました。それに伴い、子ども園も開園当初から連携教育を推進してきました。

〈平成19年度（開園当初）の課題対応策〉

幼稚園は比較的、併設小学校との連携教育が進められていましたが、保育園は、学校行事に招かれる程度の交流で、ほとんど進められていない実情を考え、本園で取り組めることを考えました。子ども園と小学校が互いの特徴を知らないまま連携することは、よい効果が期待されないため、初年度は5歳児のみに絞り、小学校全学年との連携教育を進めてきました。その他、講師招聘による連携教育

についての講話などの園内研修会や、5歳児の事例研究を通して連携教育の意義や方法を模索しながら取り組みました。

＜平成20年度の課題対応策＞

2年目は、0歳から5歳児までの全職員が連携教育を学びたいということで進めてきました。小学校では研究授業を5時間目にすることが多いのですが、子ども園の4・5歳は午睡をしている子どももいることにそこではじめて気付くなど、幼保小の連携には生活の違いを互いに理解することが必要であると分かりました。そこで、午睡をしている子どもは、後日に経験することにし、よりよい方法を考えながら進めていきました。

＜平成21年度の取り組み＞

3年目の連携教育の取り組みを進めるに当たって、校長先生と話し合い、研究発表の成果をもとに、今後を見通し、無理のない計画で互いにメリットのある連携教育ができるように共通理解をしました。今年度は、連携教育担当保育者を決め、連携推進員とともに推進するようにしました。子ども園から小学校へ発信しながら、子ども園と小学校担任との計画・実践・反省を行い、子ども園の交流・連携・接続の実践事例集作成を目指しています。19年度から区より配置された連携教育推進員（非常勤保育者）の有効活用を図り、子ども園と小学校の連携教育推進の定着を図っていくことにしました。

2. 連携教育の全体計画（平成21年度）

連携のねらい 子ども園と小学校との保育者・教師間の連携を密にし、立地条件・人的環境の特長を生かして豊かな関係がいろいろな場面ではぐくまれるよう、互いの教育内容がより充実する互惠性のある指導を目指す。

1年生「わくドキタイム」に参加 講師による園内研修講話2回 研究保育・授業1回

前2月～8月	子ども園	小学校	2学期 活動内容	3学期 活動内容
《前年度》 ①連携担当の保育者と連携推進員が次年度の計画を立てる。 ②職員会議で検討・決定 ③小学校へ発信 ④園と学校の担当で検討・調整	0歳児	6年生	・オリエンテーション ・6年生が乳児の保育室や園庭で乳児のお世話をしたり遊んだりする《事例》	
	2歳児			
	3歳児	3年生	・顔合わせ ・絵合わせゲームで遊ぶ	
	4歳児	2年生	・顔合わせ 一緒に遊ぶ ・校庭で遊ぼう《事例》 ・学校探検（研究保育・授業） 講師指導助言	

《本年度》 ⑤各連携学年の担任同士と連携推進員で実践に向けてねらい等細部の打ち合わせをする ⑥実践・反省	5 歳児	1 年生	・ゲーム、鬼遊び ・わくわくまつり《H19事例》	・学校の給食体験 ・学校ごっこ
		4 年生		・道路の歩き方の実地指導
		5 年生	・就学時健康診断で5年生がペアになって、安心して健康診断が受けられるようにサポートをする	

3. 小学校1年生「わくわくドキドキタイム」の活動に保育者が参加・見学

1 年生の ねらい	・小学校生活に適應する ・学習意欲につなげる ・学習スタイルを獲得する ・友だちとの人間関係をつくる	子ども園 の職員	・児童がどのように学校生活に慣れ、学習意欲につながっていくかを知る機会となる ・学習のスタイルを知る
--------------	---	-------------	---

【日時】 4 月 7 日～毎日30分×22回（8：45～9：15）

【場所】 小学校の校庭・中庭・図書室・教室…など

【担当】 計画的に、担任以外の専科教員等が指導、記録

【担任】 子どもへのかかわりやサポート、記録

【記録のサポート】 子ども園 1 名

【参加者の感想】

- ・子ども園も 4 月当初は人手が必要な時期で、なかなか参加できない。
- ・入学した 1 年生の姿を見られるのは初めてで、一生懸命な姿に感動した。
- ・後ろのほうにいる児童は、話を聞こうとする態度が薄れていた。
- ・学校内を探検し図書室に行ったとき、絵本の読み聞かせがあり、読書の活動へと自然な流れで、学習する雰囲気を感じた。
- ・シャボン玉遊びを 5 歳児が見ていて自分たちもやりたくなり、一緒にさせてもらい楽しんだことで、後日 5 歳児が 4 歳児へ教える姿が見られた。

わくわくドキドキタイムスケジュール

曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
4 月		7 日『おはようって言いましょう』	8 日『これは何でしょう』	9 日『おまかせ』	10 日『お話読んで』
	13 日	14 日	15 日	16 日	17 日

入学後の子どもたちの様子を継続的に参観し、学校生活をどのように過ごしているかを把握することは、園の保育・教育活動の振り返りとなり、参考になります。次のような記録のポイントを決めて記録をとり、保育討議の資料として活用できます。

〈子ども園の記録のポイント〉

- ・活動の流れや児童の様子
- ・生活面で気になったことや就学前にしておいたほうがよいこと
- ・その他（よかったことや改善点など）

4. 平成19年度実施『わくわくまつり』5歳児（40名）・2年生（60名）

○わくわくまつりに向けての経過

- 第1回 顔合わせでペアになる友達を知る。幼児の遊びに2年生を招待する。
- 第2回 わくわくまつりを一緒にすることを知る。まつりをすることに期待する。
- 第3回 お店や景品、出し物等を計画し、イメージをもつ。幼児も自分の思いを伝える。
- 第4・5回 必要なものを作ったり係を決めたりして準備を進める。
- 第6回 わくわくまつりの日

日 時	平成19年11月下旬 9：35～11：25
	2・3校時 生活科の授業の中で
場 所	四谷小学校体育館

○ねらい

- （5歳児）・遊びの経験を生かしながら、お店や出し物に参加し、2年生から刺激を受けたりして一緒に活動できた嬉しさを味わう。
- （2年生）・経験を生かし、お店や出し物を工夫してまつりを楽しむことができる。
- ・幼児への親しみや思いやりの心情を育てる。友達のよさを見つけたり、自分の成長に気付いたりする。

○わくわくまつり当日の交流の姿

- （5歳児）・準備のときから、期待をもって2年生と一緒に動く姿が見られた。
- ・自分が店の係になると、2年生のまねをして自分たちで呼び込みをしていた。
- （2年生）・当日はより意識が高く、自分たちで役割を明確にしながら進めていた。
- ・幼児にできるところは任せ、一緒になければできないところなど、自分たちで判断していた。

〈連携のポイント〉

子ども園と小学校の職員同士が短時間でも導入から反省まで、こまめに話し合う時間を見つけ、連絡を取り合う姿勢があると効果的です。そのときに、資料があると園側の考えも伝えやすく、記入してもらうなどして形にしていくようにすることが大切です。



5. 乳児各クラス（0～2歳児）と6年生との交流

- ・職員同士の打ち合わせ
- ・オリエンテーション（乳児の特徴・かかわり方）
- ・平成21年11月の2日間2・3校時、各クラスに5～6人ずつ入って、お世話や遊びをする

○6年生も初めて体験する児童が多く、お世話や一緒に遊ぶなどして感動的な体験をしました。乳児も安定し、心を開いていました。



6. 『校庭で遊ぼう』 4歳児もり組（25名）・2年1組（30名）

日 時	平成21年11月19日（木） 9：35～11：25 2校時 体育の授業の中で
場 所	四谷小学校校庭

○ねらい

- (4歳児)・2年生と一緒にゲームを楽しむ中で、親しみの気持ちを感じたりかかわることの楽しさを感じたりする。
- (2年生)・幼児と一緒にゲームを楽しむことができる。
- ・幼児とのかかわりの中で、幼児を思いやる心情を持つことができる。

○子どもの主な姿

幼児の実態	・自分の思うようにいかないときに思いを言葉で伝えられるようになってきた。 ・ルールのある遊びを自分たちで始め、楽しむ姿が見られる。	児童の実態	・体を動かすことが好きな児童が多く明るく活発なクラスである。 ・学習面では集中すると一生懸命取り組んでいる。 ・優しい面を多くもっている子がいる。
-------	--	-------	---

○主な活動の流れ

時間	活動内容	幼児・児童の活動	◎配慮 ○教員 ●保育者
9:35	・あいさつ ペアになる	・児童がペアの子を迎えにいきあいさつをする。	○事前にペアを決め、幼児の体の特徴やゲームをするときの注意点などを話し合い児童に意識付けておく。
9:45	・「なべなべそこぬけ」	・幼児の動きを気にしながら様子に合わせて楽しむ。	
9:55	・「お引越しゲーム」	・幼児は児童の話を聞いたり分からないことを質問したりする。	●幼児には事前に児童の名前を知らせ、ゲームで遊ぶことを知らせておく。
10:10	・「ユーロビートミッキー」	・踊りを教えてもらい一緒に踊る。あいさつをする。	◎配慮を要する子への対応
10:20	・あいさつ		◎役割分担を明確にしておく。

○評価 (4歳児)・児童への親しみやかかわることの楽しさを感じられたか。

- ・児童と一緒に遊びを楽しんでいたか。
- (2年生)・幼児と一緒にゲームを楽しむことができたか。
- ・幼児とのかかわりの中で幼児を思いやる心情をもつことができたか。

〈連携のポイント〉

ねらいに対して、また指導者の連携について評価をするとともに、園内研究のテーマ（本園では、豊かに感じる子どもを育てる環境）と絡めて、同じ対象児の記録をとり、幼児理解を深めていくようにするとよいと思います。



7 成果と課題

子ども・小学校の児童と知り合いになり、互いに手を振ったりあいさつをしたり、身近な存在となってきました。また、小学校の雰囲気を感じ、小学生にあこがれたり、小学校への夢をもったりしています。

職員・連携の目的や方法が分かると、担任同士で打ち合わせをこまめにできるようになり、だいぶ敷居が低くなったとの感想が聞かれます。職員同士が互いの仕事の時間帯を知り、時間を見つけてこまめに打ち合わせをすることが課題です。

保護者・就学前の子どもに大切な「自立」と「自律」を、生活や遊びの中で培っていることを理解していただき、協力していただくことが課題ですが、子どもの姿を通して連携教育の情報提供をしていくことで、保護者の連携教育に対する期待の声が聞かれるようになりました。

※参考

保幼小合同会議を小学校単位で行っています。入学後の子どもの様子や幼児期の生活、発達や学びについての理解を図るとともに、家庭との連携について情報交換を年2～3回行うなど互いに分かり合えるよい機会となっています。

区内の幼保合同研修会の中に幼保小合同研修会があります。「就学前教育の保育・教育を考える」というテーマで、7～8人のグループを作り保育士、幼稚園・小学校教諭が話し合います。この研修を生かすためには情報をそれぞれ持ち帰り、園での遊びや生活について小学校との関連を図りながら見直していくことが大切になります。

和田信行研究員からのコメント

平成19年、東京都の認定子ども園の第1号として開園した四谷子ども園は、園舎建設時から小学校との連携がその基底方針としてあったのでしょうか。私も、この園の母体となった四谷第三幼稚園長や四谷第三学校長をしていましたし、平成19年度は、四谷小学校長もしていましたので、設立までの経緯はよく理解をしているところです。

幼稚園と小学校との連携と子ども園と小学校の連携では様々な違いがあります。園長先生もこのことでは、大変な苦勞をされていることでしょう。子ども園では、幼稚園教諭と保育士と一緒に担任をしています。打ち合わせの時間も、幼稚園時代のようにはいきません。また、保小連携の指導案を作成するにも、幼小の指導案と比べると幼稚園と保育園の文化の違いが出てきます。このような困難を乗り越えて、21年度の取り組みでは、様々な活動が実施されていることを心強く感じます。特に、次の取り組みは、他園でも参考にしたいところです。

(1) 連携教育の全体計画が作成されていること

小学校との連携の全体計画が作成され、職員会議で検討・決定されています。つまり、組織として全職員共通理解のもとで進められていることは素晴らしいと思います。そして、連携推進委員と小学校の担任との間で細部の打ち合わせが行われています。子ども園の先生と小学校の先生が対等の関係で連携が行われているのです。

(2) 小学校のスタートカリキュラムに参加・見学していること

小学校では、4月から5月の連休明けまで、スタートカリキュラム「わくドキタイム」が行われています。その活動に保育者も参加すると、小学校入学直後の児童の様子が見えてきます。

(3) 入学準備カリキュラムに小学生も参加していること

入学準備カリキュラム・協同的な活動の「わくわくまつり」に小学生も参加しています。小学生の行動を通して刺激を受けることもたくさんあることでしょう。

4

村山中藤保育園（東京都 武蔵村山市）

1. テーマ

保小の連携を始めて40年、今ある自然な姿

2. 保育園名

社会福祉法人高原福祉会 村山中藤保育園「櫻」

3. 執筆者

理事長 高橋 保子

園長 若山 剛

4. 園紹介

【所在地】 東京都武蔵村山市中央1-28-1

【URL】 <http://business2.plala.or.jp/muranaka/>

【定 員】 250名

昭和41年、必要に迫られて無認可施設を開設し、法人を設立しました。そして、昭和44年に認可施設となりました。

生後43日目から就学までのお子様を預かっております。

保育理念は「人間が人間らしく育つ」です。

特に、乳児期からの機能発達を重視した保育展開をしています。また、子ども自身が持つ育つ力を発揮できるようにする保育内容で、ハンディキャップを抱える園児も自身が持つ自然に育つ力を存分に発揮しており、子ども達同士の支え育ち合う環境が当たり前のように存在しています。



保育園小学校の連携についての考え方「今までの経緯」

開設当時、私は、6月生れの10か月児の4名の子どもの育ちが大変気になりました。

例えば、体重が11kgあるのに布団に寝かせても寝返りをしない子、保育士が声をかけても無表情、無反応の子、不愉快なことがあると両手で髪の毛を握って唇の色が変わるくらい怒り、頭を上げて呼吸するときにはその手に髪の毛を5、6本握っていた子、他人との関わりを求めず自己防衛力の強い子。

子ども達の保護者はごく普通の親御さんだったので、その子達の様子に驚いたのと同時に、子どもの育つ環境要因の重要性を切実に感じ、その子達は不自然な育ちのように見えるが、誕生時には健康に生まれていたのであろうと仮説し、不自然な育ちの原因は何か、今後の健やかな育ちのための治療的な支援が可能であるのか苦悩し、研究室に通い始めたのです。

当時は、保育士資格など何の役にも立たないと狼狽し、「保育環境と子どもの育つ力」、「体の発達と医学」、「心の発達とカウンセリング」などなど、貪欲にその道の専門家を訪ねて走りました。

その中で、幼児教育と生涯学習との関連について研究者間で盛んな討議が行われていました。そして、

ある研究者が、「人は生涯の各時期に必要な学習が適切に行われることが不可欠である。科学的な保育観に基づいた教育の機会を十分に提供されることが最も望ましい」と提言されました。その後、「乳幼児期に必要な学習とは何か」、「子どもの育ちと適切な関わりについて」の議論を行いました。その中には、保育園の生活や遊びと小学校の教科の関連についても話題にのぼりました。

したがって、当保育園と小学校との連携（実践活動）は、昭和40年代（当保育園開設時）から自然発生的に始まっていたのです。

まず、一番初めに行ったことは、園児が入学する予定の地元の小学校に足を運び、今まで研究してきた保育園での生活（特に遊び）と小学校の教科（国語、算数、理科、社会）の関連について校長に説明をしたことです。

小学校の先生方は、幼児期の生活に関心があり、幼児期（保育園に通っている間）に育っていて欲しい感性についてや、入学時には意欲的に課題に取り組む子ども達の姿が大勢見られることを念頭におき、保育園での遊びは小学校の各教科にどうつながっていくかを具体的に論じ合いました。

例えば、小学校の教科の理科については、学校の先生方は、保育園の間に、植物などの栽培を体験することよりも、しっかり動植物を観る“観察力”を養った上で入学してほしいと思っていることがわかりました。“観察力”を園児に身につけさせるのは難しいのではと思いますが、実は、保育園生活と保育士の働きかけで必ず身につくことができます。

そのほかに学校の先生方の考える入学までに育っていて欲しいことについては、国語については、日常生活用語の使い方と意味を理解し、のびのびと話せること。算数は、遊びの道具などで数の概念を10までしっかり区分できること。体育や音楽は、体が覚えるので指先から全身的な動きがリズム感と平衡してできるようにして欲しいなどなど。

このような学校の先生の思いは、足繁く小学校、保育園に通い合う中でわかったことです。

今では、当保育園が小学校の先生方が考える「入学までに育ってほしいこと」を念頭においた保育を行っていることは、例え先生の異動があってもちゃんと新任教師に伝えられていて、双方の行事に子ども同士の交流を行うという実践もあり、保小の連携を効果的に双方の教育にいかしています。

小学校の校庭を借りて行う保育園の運動会

当保育園で行っている保小の連携の一環として、保育園の運動会の会場として小学校の校庭を借用することがあります。

運動会当日は、小学校の視聴覚・体育担当者の教諭がお手伝いとして、また校長、副校長も参加してください。そして、小学校のブラスバンド部の生徒が園児の入場の際にマーチを演奏してくれます。

大きな校庭を保育園児が行進して運動会が始まるのです。子ども同士の認め支え合う情景が何ともほほえましく、校庭には地域の敬老会の方達や園児の家族（祖父母様も参加されます。）が集まり、地域の大運動会のような雰囲気の中、保護者席からは拍手が場内に響き渡り、入場する保育園児、演奏する小学生の双方の子ども達が励まされています。



学校の先生方は、園児の姿から乳幼児の発達を具体的に確認できるので、校長から先生方の児童観が変わり、特に一年生との付き合い方にも変化が現れたと報告がありました。また、当日のテキパキと良く動く保育園の職員の姿に賞賛の声もあります。

保育園側の利点として、施設借用の了解は園長が前もって得るのですが、借用にかかる手続きや当日のトイレの借用など細かい所の交渉は、行事の担当者が学校や市役所に出向いて行うこと、また、借用した施設を責任持ってお返ししたいので、終了後には職員全員で清掃を行った上でお返しするので、これらのことが保育園職員が社会人としての責任とマナーを心得ることができる良い機会となることが挙げられます。

小学校との連携の事例について

当保育園では、毎年、夏期間間を利用し、近隣小学校5年生の総合学習授業の一環で行われる『保育体験学習』への協力をしています。

また、3月初旬には、就学を控えた5歳児クラスの子どもたちと、小学5年生との交流会も行っており、いずれも大きな成果をあげています。

◎夏期保育体験

◆学校側のねらい

- ・子どものために働く多くの人を見つめ、自分も多くの人にお世話になったことに気付く。
- ・園児と触れ合うことを通して、自分の幼かったころを振り返り、今までにお世話になってきた人々に感謝の気持ちを持つ。

◆実施時期

- ・毎年、7月下旬から8月20日前後までの間

◆参加する生徒

- ・小学5年生と希望する6年生から、計80名～90名程度

◆内容

◎事前のオリエンテーション（7月中旬）

保育園長または主任が小学校の教室に出向き、対象生徒に保育体験をするにあたり、知っていて欲しい

こと、気をつけて欲しいことなど話しをします。毎年伝えるポイントは以下の3つです。

○大切な命を預かる仕事である事への自覚を持つこと。

○表情に気をつけ、笑顔で過ごすこと。

○言葉使い、仕草など、子どもたちの手本であること。

その他、乳幼児との関わりの中で、戸惑うことが予測されることとして、

- ・ 適当でない方法で関わりを求めてくる子どもへの対応（叩いてくる）
- ・ どこまで手伝ったらよいのか（着替えの手伝いや、食事の介助）
- ・ いけないことをした時にはどうしたらよいのか

というように、子どもとの関わりの中で戸惑うことが予測されることについて、事例をもとに話をし、その後、生徒からの質疑応答の後、終了です。

◎保育体験、一日の流れ

1. 学校の教員と共に8時過ぎに来園（一日に5～6人程度）、保育体験をしたいクラスの希望を生徒に聞いて配属を決める。（1～5歳児クラスへ）
2. 手洗い、うがいを済ませ、持ち物を控え室に置く。
3. 各クラス担当者に紹介の後、保育体験に入る。
 - ・ 担任の手伝いをしながら、子どもたちと一緒に遊んだり、面倒を見たりする。
 - ・ 昼食、午後食を子どもたちと一緒に食べる。
4. 保育体験後（16時）、その日に感じたことを所定の用紙に記録し、提出して終了。



保育体験		年 組 氏名
8月5日(水) こゆら 組(/ 才児)		
やっていたこと	感じたこと	
8:30 外遊び	走りすがたがかわいかった。思ったこと(感)	
10:30 フォール 看がえ	気持ちよみで入ったかった。	
遊び	私のまねをしてきてかわいかった。	
12:30 お昼ご飯	こぼしながら食べていた。	
お昼ね	ねているすがたがかわいかった。	
おもあそび	大変だったけど、きれいになって	
14:30 おやつ	1人1人多かった。	
あそび	1人の子が伝えたてくれてうれしかった。	
16:00 さようなら	帰れるのがさびしかった。	
感想		
2回目の保育体験で7回目の時は少しまとまってしまいましたが、2回目はけっこうまわったのでよかったです。人見知りの子がいて大変でした。フォールの時は、水をいやる子や水のごとが好きで嬉しかった。しょうがない子などいました。遊びでは、とても楽しかったです。しょうらい保育園の先生にになりたいと思いました。今日1日大変だったけど、とても楽しかったです。また、保育園の先生はとても大変な仕事をしていることが分かりました。		

◆保育園側が思う学校生徒の育ち

兄弟がいない家庭では、幼い子に関わる機会は少なく、保育体験は貴重な経験のようです。学校とは違う環境で、幼い子の存在を肌で感じながら自然と思いを察して、気遣う姿や、思いやる姿があり、やさしさが自然と表現できるようになっていきます。

また純粋な子どもたちの前では、飾ることや装う必要がなく、素直に自分を表現することができることから、学校生活とは違う素直な優しい一面をかいま見るのができた、という学校職員からの話もありました。

◆保育園児の育ち

子どもたちにとって、小学生高学年と関わる経験は、単に遊んでもらって楽しかったという経験だけでなく、お兄ちゃんみたいに出来るようになりたいという憧れは、遊びや生活の様々な部分で意欲につながっているようです。

◎小学5年生と保育園5歳児の交流会

◆ねらい…就学を前に、学校見学をしたり、上級生と交流し、顔見知りになることで就学への不安を取り除くと同時に、就学を楽しみにできるようにする。

◆時 期…毎年2月下旬から、3月初旬

◆内 容…年長児が小学校5年生に学校案内をしてもらい、交流を持つ。

◎5年生が保育園まで年長児をお迎えに

この交流会の特徴は、5年生の生徒が、保育園に子どもたちを迎えに来てくれる事です。打ち合わせた時間に教員が生徒を引率して園庭に来てくれます。

その後、5年生が交流会の流れを説明してくれた後に、小学校に出発です。

5歳児の子どもが左側（内側）を歩けるように、小学生の右手と手をつなぎ、学校に向かいます。途中には、横断歩道もありますが、小学生が保育園児に約束事を教えてくれたり、安全に気遣いながら引率する姿からは頼もしさも伺えます。



◎学校見学・交流

校長先生からの歓迎の挨拶を聞いた後、グループ毎に分かれて校内見学の時間となります。トイレ、保健室のほか、各教室、理科室、図工室、音楽室、図書室といった特別教室も自由に入室できる態勢が全校でとられており、教室に入って授業を見学することもできます。校舎内の見学が終わると、校庭に出て

縄跳び、ボール遊び、おいかけっこ、運動遊具等であそびながら親睦を深めます。

その後、5年生から手作りのプレゼントをいただいたり、感想を報告する集会があり、お礼の挨拶をした後に、再び手をつないで保育園まで戻る、というのが一連の流れです。

保育園に戻ってから、子どもたちの中から、お礼のプレゼントを作りたいという声があがった時には、折り紙や、ペンダント、絵を描く等、製作を行い、できあがったプレゼントを担当が学校へ届けた時もありました。

後日、保育園では、学校見学の感想を話題にして、就学に向けての準備や、子どもたちが就学することを楽しみにできるように保育の中で進めていきます。

交流会を行う近隣小学校に就学をする児童は、毎年約半数程度ですが、就学校は異なるものの、小学校の雰囲気を肌で感じたり、トイレ、保健室、各教室を見学できることは、就学への不安感を和らげ、就学を楽しみにする期待感へとつながるなど、保育効果をあげています。

その他、園外保育時に市内の小学校廻りを行い、「〇〇ちゃんが行く学校だね…」とみんなに紹介することも、子どもたちにとっては嬉しいことのようにです。



保育内容と学校教科の連携

◎草花観察

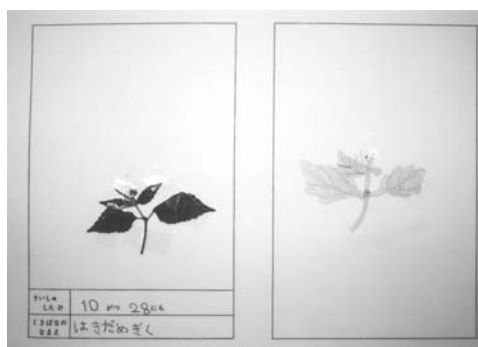
冒頭の項にもあるように当保育園では、小学校での教科と保育園での遊びを関連付け、その素地を養う意味で5歳児クラスの保育に、毎月、草花観察を取り入れています。

内容は、身近にある草花（主に雑草）を園外保育の際に採取し、園に持ち帰った後に描くというものです。

画用紙の左側に採取した草花を置き、よく見ながら右側に色鉛筆で丁寧に描いていきます。「産毛みたいな細い毛が生えているね」、「はっぱに細かい模様がついている」などなど、子どもたちの観察力に驚かされることはしばしばです。

また、「花びらの形が一枚一枚ちがうよ…」、「茎のところに筋がある」など、回を重ねる毎に、細かいところにまで目が向くようになり、着実に観察力が養われているようです。

30分程度、集中して描画にとりくみ、その後は新聞紙に挟んで押し花をつくり、次回の草花観察の時に、乾燥した草花をセロテープで左側に貼り付ける、というのが一連の草花観察の作業です。



じっくりと視る、集中して描く、といった作業を積み重ねていくことで、話しを集中してしっかり聞く力、内容を理解する思考力など、その他の様々な保育場面でもよい効果を生んでいます。

草花観察に限らず、就学を前にした幼児期に、就学を見通した素地をしっかりと育ておくことは、発達の連続性という観点からもとても重要で、意義深いものであると考えています。

小学校教員との連携について

◎特別支援教室に職員が出向いて

当保育園では、新入学児健康診断後、また、保護者が就学に向けて教育相談に行った後、保育園に各学校長より連絡が入り、担当の教諭が、日常の保育の様子を見せて欲しいと来園することもしばしばです。

観察の後には、主に児童を受け持っていた担当保育士と保育園生活全般について、関わり方、配慮が必要なことなど具体的な例をあげながら就学に向けての打合せを行うなど、教育の継続性に向けた取り組みが行われています。

また、就学した後に、担当教諭が再度、関わり方について相談に来園するケースも少なくありません。その時の状況にもよりますが、教室に馴染むまでの数日間、保育園での担当者が就学先に出向いて朝の教室で様子を見守ったり、不都合な部分を少しでも改善できる方法や、関わり方のヒント、配慮することなどを担当教諭と一緒に考えていくことも行っています。

◎武蔵村山市公立小学校教諭のボランティア研修について

上記のような小学校との連携をスムーズに運ぶ背景には、小学校教諭の新任研修の場として保育園でのボランティア研修を受け入れていることも影響しているようです。

内容は3日間、実際の保育に入って実習を行うものですが、人間形成の基となる乳幼児期の児童と接する機会は、新任教諭にとって有意義な学びの機会になるだけでなく、子どもの意欲をいかに引き出し、その気にさせていくかといった保育士の関わりは、参考になるようです。

以前にボランティア研修に参加した男性教諭は、受け持ちの男子生徒（AD/HD）との関わりで悩んでいたその時に当園に研修に来ることになりました。

我々はオリエンテーション時にその事を知らされたのですが、その男子生徒が、偶然当保育園の卒園生であったことから、在園中に担当していた職員との話し合いの時間をとり、生徒のどのような姿に困っているのかを聞いた上で、なぜその様な行為に出るのか、また事前、事後にとる関わり方のコツについて話し合い、担当者からアドバイスをする時間を取ることができました。

大学で理論は習ってきたものの、うまく行かず、現実との狭間で苦しんできたのでしょう。わずかな時間ではありましたが、理論や理屈ではなく、人と人との関わりが最も大切であることや、悩んでいたことが整理され、さらには関わり方のヒントが示されたことは大きな収穫だったようです。

事後のレポートの中には、“ほめることの大切さを再認識させられた。保育園の子どもたちは小学生に比べ、出来ないことが多い。それなのに叱ることは少なくほめることが圧倒的に多かった…、生徒の小さ

な変化も見逃さずにたくさんほめることを実践していきたい”と書かれていました。

また女性教諭のレポートには、“「ほめること」「子どもの声を聞くこと」を通して子どもたちとの距離を縮めること、教師として児童の心に寄り添うことを忘れないでいたい”と書かれたものもあるなど、学校教育の基盤となる人間教育の大切な部分を学んでいることが伺えます。

小学校教諭が保育園で研修をする取り組みは、保小連携の素地を作る意味でも、とても有意義であり、これからも継続が期待される研修だと思っています。

まとめ

保育所保育指針の改定に伴い、“保育所児童保育要録”を小学校へ送付することが義務づけられました。

当保育園は、昭和44年に認可施設として開園以来、子どもたちの就学先に児童一人ひとりの申し送りとして『児童票抄本』を作成し、届けています。特に、気になる子については、保護者の了解を得て、教育委員会の求める資料に就学に対する意見を述べるなど、詳細を記した資料を添付することもあります。

保育所保育指針では、小学校との連携について、「子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、保育の内容の工夫を図るとともに…」と、また、“保育所児童保育要録”を送付することについては、「子どもに関する情報共有に関して、保育所に入所している子どもの就学に際し、市町村の支援の下に、子どもの育ちを支えるための資料が…」とあります。

保育園・小学校双方の事業課題は異なっているとしても、また、生活や発達の連続性を図る前提としても、お互いが『子どもたちの心』を教育する場であることは変わらないということと、『人間としての育ち』の視点を見失ってはならないと強く感じています。

また、保育園児と小学生との交流について、保育士と学校教諭で話し合う機会があるかと思いますが、その時には、「子ども達が人間らしく育つ」とは何かと考えることと、子ども一人ひとりを理解することが大切であると考えます。

学校教育の基盤となるのが、保育所での乳幼児期の育ちですが、それを実際に学校教諭が目当たりにする経験や、保育士が、授業を受けている子どもの様子を見て、礼儀作法など就学までに小学校が身につけて欲しいと思っていることを知る機会を設けるなど、一つひとつの具体的な働きかけがあって初めて保小の連携が有意義な結果に繋がっていくものと考え、当保育園では実践しています。

寺田清美研究員からのコメント

村山中藤保育園は、40年にわたり小学校と積極的に連携を行っている事例です。豊かな自然環境の中で、地域全体を考慮し、地域の子どもたちをまるごとケアしていこうという姿勢は、「保育所と小学校との連携」のあり方の1つのモデルとして参考になります。

(1) 子どもの育ちの連続性のあり方

「乳幼児期に必要な学習とは何か」、「子どもの育ちと適切な関わりについて」などを十分に議論し、保育園の生活や遊びと小学校の教科の関連について検討して、小学校の先生方が考える「入学までに育ってほしいこと」を念頭においた保育を、日常の保育の中で展開し、特に「保育内容と学校教科の連携」の「草花観察」の事例は素晴らしいものです、

松寄・和田・田中研究員と共に2009年8月に視察訪問した際に、私も感銘を受けました。保育所児童保育要録（村山中藤保育園では、「児童票抄本」という）も、長年にわたり他の園より、2ヶ月早い1月には小学校に持参し、個別に子どもの発達を伝達しています。この時期に受け取る小学校は、保育要録を参考にクラス編成や指導計画を考慮できるので大変助かるそうです。受け入れる小学校側への配慮は、進学する子どもには有効に活用されることにつながり、園児への愛情が感じられる事例です。

(2) 行事交流からの地域連携へ

保育園の運動会を、小学校の校庭を借用して実施する。この行事をきっかけに、乳児から高齢者までの異世代間交流、卒園児だけではない地域の子どもも含めた地域交流が生まれ、地域包括支援を担う保育園だからこそ培える交流と連携のあり方の参考になる事例といえます。

(3) 小学生・教員の保育参加・保育士の授業参観

小学5年生の保育体験を実施しています。この中では保育体験をする児童だけでなく、小学校教員が保育所で活動したり、保育士が授業を受けている子どもの様子を見るなど、参加者がそれぞれに実りある体験を活発に行っています。

長年継続してきた経験の賜物といえますが、保育園・小学校双方の働き掛けがあって初めて「保小の連携」が有意義な結果に繋がっていくという実践事例です。



5

馬場保育園（石川県 金沢市）

1. テーマ

子どもの育ちを共に理解し、学びあう交流

2. 保育園名

社会福祉法人馬場福祉会 馬場保育園

3. 執筆者

園長 志賀浦 由紀子

4. 園紹介

【所在地】 石川県金沢市東山 3 丁目29番22号

【設置者】 社会福祉法人 馬場福祉会

【代表者】 理事長 大窪 重宏

【設立年月日】 昭和28年 9 月11日

【定 員】 60名（面積で75名まで入所可能）

【URL】 <http://baba-hoikuen.com>



本園は金沢市内中心部の馬場校区にありますが、四季折々の景色を感じることのできる卯辰山や、女川といわれる浅野川がすぐ近くにあり、早朝から散歩する人たちが行き交います。馬場校区は、高齢化率は金沢市内で第1位といわれ、子どもが少なく、すぐ近くの金沢市立馬場小学校も全学年が単級という地域にある小規模園です。地域立の保育園として、戦前の慈善事業から始めて以来、今年で70周年を迎え、現在75名の園児と、パート・派遣職員を含めて18人の職員が在籍しています。当園の園児の中には、祖父母の家が保育園に近い、職場に近いという理由でこの保育園に来ている子どもも多くおり、戦前からの温かい近隣関係が残っている地域で、子どもたちは常に近所の方のやさしい声かけやまなざしに守られて過ごしています。また、馬場小学校は各学年30人未満の小さな学校ですが、同小学校に入学する児童は7～8か園の幼稚園・保育園から入学してくるそうで、本園の子どもたちも、今年の年長児16名は、7校に分かれてそれぞれに住居のある校区の小学校に入学していきます。卒園した後に揃って同じ小学校に入学するわけではなく、近くに幼稚園が2か園あることもあいまって、当園と馬場小学校とは以前から強いつながりで交流していたわけではありません。

1. 交流を始めるまで

平成14年度、小学校に「心の教育推進委員会」が立ち上がりました。同委員会は、小学校・小学校PTA・中学校・幼稚園・保育園・放課後児童クラブ・公民館・子ども会・児童館・町会・女性部と地域のすべての関係代表者で構成されています。委員会では、その時々の子どもの様子や気になるできごと、

例えば、公園での遊びの様子、コンビニでの買い物・お金の使い方、挨拶をしなくなったなどを、構成員がそれぞれの立場で発言し、地域全体で子どもを見守るという意識を共有しながら、問題行動への対応、子どもの安全確保、心身ともに豊かな児童育成のための教育の在り方について話し合っています。年に3回のペースで現在もこの会合を続けています。

当園が、小学校との連携を図り、今では緊密な連携を保っていることができるのは、委員会で作られた信頼関係、具体的な交流・取組みから始まったと言えると考えています。

2. 小学校と保育園の交流の4つの課題

従来から、馬場小学校との間には、「運動会の見学」や「新一年生を迎える会」など生活科の授業や行事のなかでの交流がありました。「遊び」をとおして学ぶ保育園の活動と「教科学習」をとおして学ぶ学校の教育活動では、子どもたちにとって大きな段差があるといわれており、一体どのような段差なのか、どうすれば段差を解消できるのかという思いから、小学校と保育園との間で職員同士も含めたさらなる連携がスタートしました。

馬場小学校との連携に当たっては次の4つの課題を設け、北陸学院大学の太田雅子先生をアドバイザーにお願いして実のある交流になるようにと進めていきました。

(1) 職員間の相互理解を深めるための合同学習会と保育体験

A. 合同学習会

小学校の指導要領・保育園の指導計画を読み合い、相違点や疑問点を出し合うことで相互理解を深めていくことを確認しました。

そこで明らかになった学校との「育ち」の考え方の違いを下表に表しました。

項 目	保 育 園	小 学 校
生活リズム・空間の使い方	・大きな時間枠のなかで保育活動を行う ・それぞれの子どもが興味・関心に応じて好きな場所で遊ぶ ・机・椅子等は主に食事の時や制作活動で使用し、床に座るなど自由な姿勢で活動ができる	・チャイム等区切られた45分の単位時間での学習をする ・クラス単位で教室など、同じ場所で学習する ・自分専用の机・椅子がある
学習の内容	・毎日の生活習慣の中にある学びを大切に ・「遊び」を学ぶ場とする ・一人ひとりの興味関心に基づいた学びを大切にする	教科の枠での興味・関心・態度、理解、技能、表現等を学力（学び）と考え、大切にする

育ちの見取り（評価の仕方）	・ 個人内評価 ・ 一人ひとりの伸びを評価する	個人内評価を加えた絶対評価 評価基準を基にして評価する
保護者への対応	・ 送迎時に顔を合わせることが多く、直接面談し、言葉（会話）での連絡が多い。日常の細かい成長などもリアルタイムに報告できる	・ 連絡帳など文章での連絡が多い ・ 参観日、通知表渡しなどの目的のはっきりした懇談会が多い ・ 学校へ行く機会が少なく、相談がしにくい

指導要領や指導計画を読み合うことで、保育園にも具体的な指導計画があることを知って小学校の先生方が驚いたことに、保育園関係者として逆に驚きました。

イ. 小学校教諭の保育体験

馬場小学校の先生に、夏休みの期間に保育園に来ていただき、3歳以上児の縦割り混合クラスに入って一日の保育体験をしていただきました。

その時の感想として、次のようなことがあげられました。

- 一人ひとりの興味を大切にするために、見守る支援が印象的だった
- 保育士は困っている子には手を貸し、手伝うなど主体的な子には具体的な声かけをしていた
- 同じフロアの中で異年齢の子ども達が自然に関わり、学び合いをしている姿が印象的だった



2月には、低学年の先生方に来ていただき、保育園での出前授業を予定しています。

(2) 年長児保護者との段差をなくすための懇談会

年長児保護者の中には、初めて小学校に入る子をもつ保護者もあり、小学校生活や学習面にいろいろな不安をもっている人が少なくありません。

そこで、馬場小学校の参観日に保育園年長児の保護者にも参観の声をかけ、参観のあとに、小学生の保護者・学校の先生方と保育園の職員も参加して懇談会を開きました。

年長児の保護者からは、

- どのような準備が必要か
- 入学時にどれくらいの費用が必要か
- 子どもが落ち着きがなく、45分間座ってられるか、小学校では大丈夫か心配
- 現在仕事をもっているが、仕事は辞めたほうがいいのか

などの質問が出されましたが、参加者の中から同じ親としてのアドバイスや回答があり、その後、年長児の保護者から

- 学校はきちんとしなければならないというイメージだったが、安心した
- 完全に不安はなくならないが、何とかかなかなと思えた
- 生徒も保護者も楽しそうにしているので、いい環境だと思った

との感想が述べられ、保護者の不安な気持ちは少しずつ解消されたように思います。

この懇談会は、馬場小学校以外の小学校に入学する子の保護者にも声を掛け、今後、毎年続けていく予定です。



(3) スムーズな移行のための小学校スタートカリキュラムの提案

園児は、小学校に入学したときに保育園との大きな違いを、保育室とは違い教室には大きな黒板があり、一人ひとりの机があり、きちんと座って学習を進めるといった環境の違いで感じています。

一年生にとってはクラスの新しい友達だけでなく、圧倒的に多い上級生と関わっていかなければなりません。また、保育園で遊びを中心とした総合的な生活を送ってきた子どもたちにとっては、時間の概念がまだまだ希薄な段階であるにも関わらず、いきなり45分の時間枠を強いられるのですから、これは子どもたちにとっては慣れないばかりか毎日が緊張の連続となっているかもしれません。

そこで、入学当初のスタートカリキュラムは、

- ★ 保育園の「体験を重視する学び」のスタイルを重視しつつ、小学校生活に適應すること
- ★ 基本的な生活習慣等を育成すること
- ★ 教科等の学習活動に円滑な接続を図る

ということをおねらって策定していくことになりました。

そして、1、2限は45分間の普通授業とし、4月に3～5限でスタートカリキュラムの時間「たまみず」(=馬場小学校のマスコット)の時間として次のように活動することにしました。

- 好きなものを絵に描いたり、言葉にしたり、工作をしたり自分で選択し
- 机、椅子にとらわれない、場の捉え方で
- 保育園のコーナー遊びに似た空間をつくる

というもので、小学生になったから皆で勉強する、という意欲を大切にしながらも保育園時代のゆったりした、自分のやりたいことにも取り組めるという配慮をしました。

さらに、保育園と小学校生活の共通指導項目を確認しました。

- ★ 安全な生活＝危険なことを理解して安全に過ごす
- ★ 生活習慣＝気持ちの良い挨拶ができるようにする
- ★ 話すことと聞くこと＝相手を見て、話す、聞くことができるようにする
- ★ 絵本等の読み聞かせ＝文字、言葉の感性の育成と読書習慣をつける

また、アドバイザーの太田雅子教授からこのスタートカリキュラムについて

- 保育園でも5領域のねらいがあり、遊びのなかで総合的に入ってくるが、これに似ている
- 保育園では自ら遊びを選べることでストレスは少ないと思われるが、学校では、手のあげ方や発言の仕方など細かいきまりがあり、このカリキュラムをどう展開するかが大切
- 文字に関しては興味関心が重要だが、スタートラインを揃えておくことも必要

という助言をいただきました。

子どもたちがスムーズに小学校生活に入るには、学校側と保育園側の接点について話し合うことが大切だと確認しあいました。これらスタートカリキュラムについては、今後も相互に話し合うなどのワーキングを行う予定です。

(4) 児童との交流（従来からの交流とほぼ同じ）

ア. 6年生と年長児の「ウォーキングと公園で遊ぼう」

園児と児童の交流を促進するため、保育園年長児と6年生が手をつなぎ、卯辰山へ散歩しました。

この交流では、園児の楽しそうな様子を見て、自分たちの接し方が小さい子の喜びにつながっていることに気づき、異年齢の子との関わりの中で、自分の有用感を感じ取った小学生が多かったと思います。一方、大きい小学生のダイナミックな動きに憧れ、園では挑戦できないような遊びに取り組んでいた園児たちの躍動感が鮮明でした。また、いつもは怖いものなしのわんぱくの年長男児が、6年生の言うことを素直に聞いていたのも印象的でした。

イ. 5年生と年長児の就学時健診時の交流「一緒に遊ぼう」

新入学のための就学時健診では、保護者説明会の時間帯を、春に最上級生になる、現在5年生が年長児とグループになり、交流します。

紙芝居、ゲーム、鬼ごっこなど子ども同士で遊びが展開され、教師は子どもの様子を観察をすることで、運動が苦手な子、集団から離れやすい子、集中して紙芝居などを聞けない子などを見取ります。その後、必要があればそれに関する情報を伝達することになります。

ウ. 1年生と年長児の「年長さんを迎える会」

1年生が学校紹介をしたり、先生役になって模擬授業をしたりして、年長児は学校での勉強の仕方が少しわかり、ドキドキしながらも、1年生になることへの期待が膨らむ交流です。1限10分の授業で、国語（教科書を読む）、算数（簡単な問題に答える）、体育（縄跳びをする）、音楽（鍵盤ハーモニカの演奏）という内容です。

エ. 2年生が出身園と関わる活動「自分探検」～自分の保育園のころ～

小さかった頃の自分を調べ、今の自分を理解し、未来の自分につなげていくという活動で、保育園にいた頃の自分を訪ねるものです。

自分自身が好きなことがあまり変わっていないことや、自分が忘れていたことでも職員がよく覚えていてることに驚いた様子でした。

オ. 3年生と3歳以上児の「図書館へ出かけよう」～本を読んでもらって一緒に遠足～

秋の日、朝10時に小学生が保育園まで迎えに来てくれて、40分程で、玉川子ども図書館に着きました。街の中心部なので3年生が大変気を遣いながら歩いている様子で、思った以上にスムーズに行くことができました。図書館の中では、「どんな本がすき？」と尋ねた上で、一緒に本を探し、ゆったりと穏やかに読み聞かせる姿がありました。



図鑑に興味のある子、お化けのお話が好きな子、昔話が好きな子など、それぞれに選んで好きな場所で読んでいたのですが、3歳児とは初めて会ったとは思えないくらいに、互いを受け入れ心地よい時間だったようです。食事のあとの遊びの様子は、アの公園の時と同じような反応が見られました。

まとめ

保小連携は、子どもたちにとって段差を解消するやさしい保育園でありたい、あるいは小学校へのつながりを探りたいという思いから始めた交流ですが、職員同士の合同学習会や保護者との懇談会、子ども同士の交流等を重ねるうちに、はっきりと見えてきたことがあります。

“段差を作らないことではなく、段差を乗り越える力を育てること”

“人を信じるという実感がもてて、さまざまな人間関係のなかでも自分を発揮できる力を育てること”

これこそが私たち保育園の役割であり、保育の原点だと感じました。すべての子どもがこの時期の段差を不安と感じて小学校生活に入っていけないというものではなく、期待と喜び・大きくなったことへの自信と自覚で生き生きとしている子も多くおり、スムーズに小学校生活に溶け込んでいけるのです。気持ちの切り替えや新しい環境への適応力を手助けするのが、関わる大人の役目であり、まず、人を信じること、人と関わる力を養うことが何より大切といえるのではないのでしょうか。

この原点をふまえた上で、その園の地域性や独自性、そして一人ひとりの発達をしっかりと捉える日々の保育があってこそ、子どもたちが生き生きと自分を発揮できる小学生へと移行していけるのではないのでしょうか。それこそが段差のないつながりになると思います。

寺田清美研究員からのコメント

馬場保育園の特徴は、地域連携の充実にあります。平成14年度から、「心の教育推進委員会」がスタートしました。地域全体で子どもを見守るという「社会的親の意識」を共有し、関係者が問題解決能力を高めるこの活動の影響は大きいといえます。そこにはまさに、子どもの最善の利益を考慮した、心身ともに豊かな児童育成のための地域連携の芽が育まれています。また、「保小連携」を年に3回のペースで現在も継続中であることも、連携をスムーズに推進させている原動力といえるでしょう。

(1) 市のモデル実施から

金沢市の保育園・小学校一貫プログラム実践モデル校は、平成19年度は、市立小学校・保育園・幼稚園が各2箇所、平成20年度は、3箇所の保育園と小学校と幼稚園が各2箇所で開催されました。

馬場保育園はこのモデル事業を活かした保育園です。最初の出会いはモデル事業であってもその継続性を維持できるかが大切です。平成21年9月に和田研究員と調査訪問した際に、保育園・小学校の職員間の交流が十分されていることが効果をもたらしているものと感じられました。

(2) 保育園・小学校との合同学習会

保育園の指導計画と小学校の指導要領を読み合う中で、相違点や疑問点を出し合い、その中から相互理解を深めていくという活動を実践しています。また、そこで明らかになった保育園と学校との「育ち」の考え方の違いを、表にして明確化することによって、参加者全員に共通の認識をもたらし、取り組みをしっかりとしたものになっています。その成果がスタートカリキュラム誕生といえるでしょう。

(3) 年長児保護者との段差をなくすための懇談会

年長児の保護者が、学校生活や学習面に不安を持つと、保護者(親)の不安な精神状態がそのまま子どもに伝わることもあり、子ども自身が入学前に拒否感を抱く場合も少なくありません。

馬場保育園では、小学校の参観日に保育園年長児の保護者が参加し、参観のあとに、小学1・2年生の保護者や学校の先生方と保育園の職員も参加して懇談会を開いています。この取り組みは、学校の生活だけでなく、卒園後の学童保育への対応なども先輩ママから話を聞くことが出来、保護者と年長児の不安感を減少させ、肯定感を育む機会につながるため、ぜひ参考にしたい事例だと考えられます。



6

おおわだ保育園（大阪府 門真市）

1. テーマ

広がりゆく保小の連携

2. 保育園名

おおわだ保育園

3. 執筆者

理事長・園長 馬場 耕一郎

4. 園紹介

【所在地】 大阪府門真市野里町 4 - 39

【URL】 <http://www.oowada.ed.jp/>

おおわだ保育園は、大阪府門真市にあります。門真市の主な産業は、家電産業です。大手電機メーカーの本社があり、下請けの企業も多数あります。大阪市内からは、電車で20分程度であり、市内へ勤務する方も多数いるベッドタウンです。また、第二京阪道路の開通が予定され高速道路の要所でもあります。

おおわだ保育園の創立は昭和56年で創立29年を迎えます。定員は170名です。保育園の周辺は、住宅に囲まれています。近くには、鶴見緑地や深北緑地があり、住宅街の中でも自然と身近に接することができます。園児の大半は自転車で登園しています。門真市内には、15の小学校があります。卒園児は2つの小学校に3分の2入学しています。



保育理念

家庭的な暖かさ、やすらぐ環境の中で子どもの自主性、個性を大事に伸ばす。

保育の3つの柱（保育方針）

「あそぶ」「わらう」「たべる」を通して生活習慣や生きる力を身につける。

○よくあそぶ

- ◆おもいっきりからだをつかってあそぶ
- ◆知的に遊んで創造力を養う
- ◆自然の中で遊ぶ

○よくわらう

- ◆「ありがとう」と言える
- ◆元気にあいさつができる
- ◆思いやりがある
- ◆ユーモアがある



◆好奇心とやる気がわく

○よくたべる

◆野菜を育てて食べる

◆楽しく食事をいただく

連携の経緯

6年前の平成15年度より小学校との連携を始めました。そのきっかけになったのは、1年生の卒園児が小学校で引き起こした問題行動でした。小学校からの問いかけにより、在園中の事柄や保護者の方への対応など情報交換を行いました。当初は、校長先生との会談から始まりました。情報交換を重ねるごとに卒園児の対応に光が見えて、保育園側も小学校の授業を見学させて頂く機会を設けました。園長が授業を見学に行くと、問題行動を起こしていた卒園児はとても喜び、学習態度にも変化が見られたそうです。授業中に着席し、発言回数が増え、わがままな発言も減少されたと担任の先生から報告を頂きました。今まで何度も注意しても治らなかったことが、授業参観を繰り返し行うことで改善の兆しが見えたことで小学校と保育園の連携の大切さを互いに実感しました。

卒園児の問題行動が治まり、校長先生の「どのような保育園で過ごしていたかを知りたい」という希望から保育園の見学が実現しました。最初は、校長先生そして低学年の担任の先生方が見学にいらっしゃいました。初めて保育園に訪れた先生方は遊具や保育室の環境など全てが新鮮に写ったようで「このような所で育ったのですか」という感想が聞かれました。以来、小学校との連携を積極的に行うようになりました。

放課後児童クラブ（学童保育）

4年前より門真市内の15校ある公立小学校での学童保育の運営が、順次教育委員会直営から門真市内の保育園・幼稚園に民営委託されました。現在、おおわだ保育園では、5つの小学校において放課後児童クラブ（学童保育）を運営しています。放課後児童クラブというのは、小学校内の空き教室を利用して授業終了後から18時まで1年生から6年生まで預かっています。夏休みなどの長期休暇は、朝8時30分から開所しています。



保育士の学童保育への派遣

おおわだ保育園の保育士を小学校で運営している放課後児童クラブへ出向させています。卒園児からは、保育園で一緒に遊んだことのある先生が小学校にいるということで、計り知れない安心感に繋がっています。

す。小学校入学当初に不安を抱える児童が多い中、学校内に知った顔の先生がいるということで、スムーズな移行が来ています。保小の連携の中で小学校の中に保育園の職員が常駐していることで、情報のやりとりや信頼感など計り知れない効果があります。

保育士と同じユニフォームの着用

おおわだ保育園の保育士と同じユニフォームを放課後児童クラブの職員にも着用させています。校門に警備員が常駐し、小学校への入校は、教育大付属池田小学校の事件以来大変厳しいものとなっています。しかし同じユニフォームを着ることにより、保育園の職員も自由に学校に出入りすることができます。職員相互が自由に行き来する環境を整えることで、スムーズな伝達や意思疎通ができることに繋がっています。



何よりも卒園児と保護者に対して、保育園の職員が小学校にも常駐していることが伝わり安心感につながっています。

職員会議での卒園児の様子報告

毎月開催する保育園の職員会議の中で、今月の卒園児・小学生の様子を報告をしています。

年長児の担任だけの交流になりがちですが、全職員に今の小学生の姿を伝えることで、広い視野を持ち保育に取り組めるようにしています。また、担任をした卒園児の姿を伝えることで、情報の共有化を行っています。情報共有の成果として、卒園児と顔を会わしても自然な会話がすぐにできる効果があります。

小学校教員との懇談会の開催

学期に1度の割合で、1年生、2年生、3年生の担任の先生方と情報交換をメインにした懇談会を開催しています。一人でも多くの人に子どもの理解者を増やすために始めました。卒園児の保育園時代の様子を聞くことにより、小学校の先生方も卒園児に親しみが増すようです。保育園と小学校での指導に一貫性を持たせ、早期の問題解決に繋がっています。今までは、A君にこのような事例があったのだということに悩んでいた小学校の先生が、保育園でも見られた事例の場合の対応策をアドバイスすることができました。対応をアドバイスした為に早期改善に繋がった事例がいくつもありました。

同じ学年の子供と比べるだけでなく、保育園からの成長、経緯を知ることによって対応の幅が広がったと小学校側からは言われています。また、在園児のカリキュラムにも反映されています。

スマイルサポーターのパンフレット配布及び相談

大阪府では、平成21年5月27日に大阪府知事の認定による地域貢献支援委員制度が始まりました。(通称 スマイルサポーター) 今までの育児相談の枠を超えて「困ったことがあれば保育園に」を合言葉にあらゆる相談を受け付けています。開所時間が12時間あり、敷居の低い保育園が相談窓口を開設していることを周知する為にパンフレットを5校の小学校で配布しました。

家庭が抱えている様々な問題に対して、どこに相談すればよいか判らず、放置している案件があります。問題の早期発見早期対応をこの制度は目指しています。決して保育園だけで問題を解決するのではなく、相談を聞き、適切な関係機関へつなぐ役割を担っています。学校の先生には相談しにくいこと、誰かに聞いてもらいたい心の内を話すことで保護者の育児不安の軽減に繋がっています。

実際、パンフレットを配布後には、DVに関する相談が2件寄せられました。担当機関と連携を取り対応しました。卒園児以外の保護者にも保育園を身近に感じて頂くことが大切だと感じています。

小学校での育児相談

放課後児童クラブの教室を利用して育児相談を行っています。相談は、育児相談員の資格を持つものが対応しています。相談内容は、「家庭での言葉遣い」「友達関係」「発達に関すること」など多岐に渡っていますが、相談の後は「話してよかった」と保護者の方にはおっしゃって頂いています。学校には相談しにくい些細な悩み、保護者のあらゆる悩みを溜めないうちに吐き出してもらうことが、子ども達への良い環境に繋がると信じています。

小学校校庭への散歩・自由遊び

お散歩のコースとして小学校の校庭があります。自由に出入りできる環境にあるので、職員にとっても園児にとっても小学校という存在が身近になっています。生活の中で小学校というものを保育園時代から身近に感じる事が散歩や校庭での自由遊びで養われています。保育園から小学校へスムーズな移行につながる地ならしになっています。



運動会の参加 小学校編

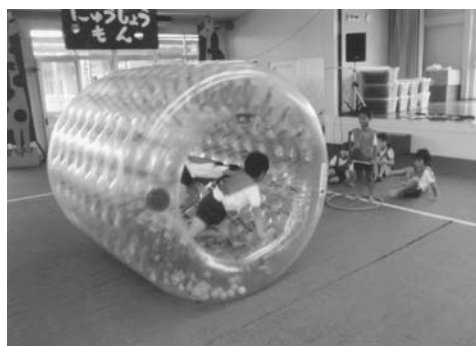
小学校の運動会のプログラムに保育園児が参加する機会を作っていただきました。日曜日の開催なので、保育園からは運動会の告知を行い、保護者の方に引率して参加して頂いています。保育園の職員も運動会に見学参加しています。園児の参加率は8割を超え関心の高さがうかがえます。

運動会の参加 中学校編

校区の中学校の運動会は平日に行われています。年長児が招待を受け、玉入れの種目に参加しています。中学生は、保育園に職場体験として関わりがあるので、大変歓迎して下さいます。卒園児や卒園児の保護者も多数参加されているので、運動会の方が同窓会になっています。卒園しても保育園以外の場に関わりを持つことで結びつきが大変強いものになっています。また、卒園児が普段の学校での顔と違う面を見せるので、中学校の先生からは「素直な可愛い面もあるのだ」という感想が毎年聞かれています。園児には、小学校を卒業すれば中学校に行くことを運動会の際において伝えています。子ども達からは、「小学校よりも広い」などと言った感想が聞かれます。

運動会の参加 保育園編

おおわだ保育園の運動会には、2校の小学校の校長先生と1校の中学校長先生の来賓として参加して下さっています。小学校に関わりのない保護者は、運動会で校長先生と顔を会わせることになります。保護者にとっても就学半年前の段階で小学校の先生と関わりを持つことで、全く知らない世界へ飛び込む不安を少しでも解消できればと考えています。実際入学説明会の際には、運動会で顔を会わせたこともあり、緊張が和らいだと保護者から感想を頂いています。校長先生には、地域の方の参加種目に出場して頂き、地域の小学生、中学生約80名と一緒に汗を流して頂いています。保育園としては、校長先生が身近に感じてもらえる演出を行っています。



土曜日の合同保育

土曜日に保育園において保育園児と学童の子ども達の合同保育をおこなっています。

0歳児から小学生が同じ園庭で遊んでいます。小学生が、乳児をだっこしたり、オムツをたたんだり、世話をしてくれます。園児の登園は30名弱。小学校は、2つの学校から約20名の参加があります。

遊びの手本を見せてくれることも魅力の一つです。鉄棒の連続逆上がりや足掛け連続周りなど年長児が出来ない技を披露し、コツを伝えています。園児も身近な存在の小学生に教わることで、「自分でもできる」と思うようです。また昼食も同じ部屋でとることで異年齢の交流が深まります。学校では、気力の無い小学生も保育園児の前では、積極的に関わりいきいきとした



表情になっています。

毎週土曜日に関わることで、子ども達同士の中で連携が始まっています。核家族化の中で異年齢との関わりが希薄になっている今、土曜日の交流は大変有意義であります。

園庭開放

地域の小学生に園庭を開放しています。卒園児を中心に遊びの輪が広がり、卒園児以外の小学生も来園するようになりました。地域の中で安全に安心して遊べる場を提供することを目的としています。来園児に受付にて名前の記載を義務付けていますが、その際に「挨拶」「言葉遣い」等、保育園で身につけたことが継続されているかを確認しています。卒園児からは、「大丈夫、心配しないで」「毎回同じことを言わなくても大丈夫」という声も聞かれますが、卒園してもあなたのことを心配しているということを伝えることが出来ます。また、スキンシップを行うと恥ずかしがりながらも笑顔になる子が多いです。一人でも多くの大人が自分のことに興味をもっていることを伝え、見守ることが大切だと思います。

適塾の見学

大阪には、緒方洪庵^{おがたこうあん}が設立し、福沢諭吉が学んだ適塾（てきじゅく）があります。毎年、小学校へ進学する子ども達に約20分電車に乗り社会見学として保育に組み入れ2月頃に見学させています。この2月のいう時期は、ランドセルや学習机が手に入り、新入学説明会等を終え自分が入学する小学校に行ったことがある時期です。この時期に行くことで、学び舎に対する意識も大きく変わっていきます。



昔の寺小屋の環境を体験させることで、今の小学校がいかに恵まれた環境にあるかということを実感できます。昔は、薄暗い部屋で一人畳一畳のスペースしかなかったこと。教科書は、墨で書かれていて写真も無いこと。暖を取るのは、火鉢しかなかったこと等厳しい環境の中で学んでいたということを伝えています。比較対象を持つことで現在の小学校に対するイメージも大きく変わるようで、子ども達からは「今の学校でよかった」や「真っ黒な字ばかりで書かれた本で勉強するのが嫌だ」と言った感想が聞かれます。

12年保育の実施

平成21年度より、おおわだ保育園は12年保育を行うことを宣言しました。

0歳から就学前の6年と小学校での6年の12年間、子ども達のケアを行うという決意の表明です。保育園・小学校の垣根を越え、地域の核として保育園が子育てのサポート拠点になればと思います。「困ったことがあれば 保育園に」を合言葉に子ども達のよりよい成長を見守っていききたいと思います。

結びにあたって

保小の連携は、日々手探りの連続です。ただ、保育園側も小学校側も遠慮していると何も進まないことは間違いないと思います。子ども達も小学校に進学する時にドキドキとした気持ちを持ちました。たくさんの不安も覚えました。私達も同じです。子ども達が乗り越えられたことを私達に乗り越えられないはずはありません。勇気を出して一歩ずつ歩んで行きたいと思います。子ども達の笑顔のために。



松寄洋子研究員からのコメント

おおわだ保育園は、小学校との関係を積極的に作って連携を行っている事例です。その中心は、学童保育と小学校との交流や情報交換ですが、子どもを卒園時までだけでなく、その後も関与し、ケアしていこうという姿勢は、保育所と小学校との連携のあり方の1つのモデルとして参考になります。

(1) 学童保育のあり方

近年、放課後児童クラブ（学童保育）の運営を行っている保育所が増加しています。おおわだ保育園では、単に保育士を派遣するだけでなく、ユニフォームや職員会議など、保育所と小学校とをつなぐさまざまな機会を作っています。子どもたちにとって環境の変化による影響は大きいものですが、保育所職員のまなざしが子どもたちに安心感や安定感をもたらしています。

(2) 小学校との関係性、地域への開放

小学校の教員や小学生に対しては、保育園見学、園庭開放、小学校への散歩や行事参加、小学校教員との懇談会など多くの機会を作り、関係を深めています。また、放課後児童クラブを利用して育児相談も実施するなど、子どもとその保護者を支援する多くの手段をとっています。

今後も保育士が小学生の様子を深く理解することにより、保育所の保育自体もさらに向上することが期待できるでしょう。



7

のあ保育園（山口県 下関市）

1. テーマ

今後の保小連携に向けて

— 日常の保育から保小連携を振り返る —

2. 保育園名

社会福祉法人 のあ保育園

3. 執筆者

副園長 田中 浩二

4. 園紹介

【所在地】 山口県下関市武久町 2 丁目70-10

【理事長】 田中 和夫

【設置年月日】 昭和50年 8 月 1 日

【定 員】 120名

【URL】 <http://www.noa-hoiku.com/>

下関市は西が日本海、南東が瀬戸内海に接する本州の最西端に位置し、2005年に1市4町の合併で面積716.06km²、人口は約29万人（2009年）となり、現在、中核市の指定を受けています。

本園は、旧下関市内の住宅地に所在し、現在、128名の園児が在籍、22名の職員が所属しています。下関市は海や山など自然が多く残されていますが、本園でも自然環境を特に重視しており、園庭には桜やイチヨウ、ドングリの木、たくさんの草花など四季を感じることのできる環境を整えとともに、自然の中で体験する遊びを取り入れるよう意識しています。



1. 下関市とのあ保育園の就学状況について

下関市内には公私立56か所の保育所がありますが、合併により下関市内でも市街地から山間部まで地域事情は大きく異なっており、保護者の就労状況や家庭の状況などは非常に多様といえます。また、54校ある小学校も保育所と同様に地理的条件は様々で、保育所と小学校が隣り合わせでかつ小学校へ就学する子どもも1か所からという小学校もあれば、複数の保育園や幼稚園から就学してくる小学校もあります。



本園園児の就学状況については、その多くが保育園の近所に居住しているため、卒園児の約8割が近隣の2つの小学校に就学し、全体としては約7か所の小学校へ就学します。

2. 小学校の情報交換・交流の状況と保育園での就学準備

本園では、小学校との連携について極めて特徴のある取り組みを行っているわけではありません。東京成徳短期大学の和田信行先生が示す連携段階でいえば、第二段階の「保育園と小学校の定期的な情報交換や交流」が行われている段階にあたります。以下では、本園で行われている小学校との情報交換や交流の様子を挙げます。

(1) 小学校との情報交換

まず、就学前の子どもについての保育園と小学校の情報交換の場としては、年一回、概ね年度末の2月に小学校区毎で行われる保幼小連絡協議会があり、主任保育士や年長の担当保育士が参加します。保育園職員が小学校へ訪問したり、小学校教員が保育園に来て子どもの様子を見たりと、協議の形態は小学校によって異なりますが、概ね、食事や着替え、整頓などの基本的生活習慣をはじめとした子どもの保育園での生活の様子や性格、友だち関係、必要に応じて家庭での様子や家族関係などについて情報の交換を行います。特に、小学校教員が保育園に来て、実際に子どもの顔や様子を見ながらの情報交換は、たとえ短い時間であったとしても、友だちとの関わりや生活の様子をより具体的に伝達することができるように感じます。また、保幼小連絡協議会での伝達が不十分だったことについては、追加で相互に訪問あるいは電話で情報交換を行います。



なお、本園の卒園児の多くは主に近郊の2か所の小学校に就学するため、ほとんどの就学前の子どもの情報交換については保幼小連絡協議会でまかなえますが、校区外の小学校に就学するなど保幼小連絡協議会に参加できない際には電話で子どもの様子を伝達することになります。

(2) 小学校との交流

保育園と小学校との交流については、まず園児と小学校との交流として、小学校の運動会などの行事の際、子どもが就学先となる小学校に行き、徒競争などの運動会のプログラムの一部に参加し、小学校での行事の雰囲気を感じます。また、保育園での園外活動として、散歩を兼ねて多くの子どもが就学することになる2か所の小学校へ遊びに行きます。本園では、就学に向けて期待や意欲を高める活動の一環として秋以降に訪問して授業の様子を見学し、校庭で遊びます。実際の授業の様子を見学したり、保育園よりも広い校庭で遊ぶことで、小学校に向けての意識が強まり、保育園での小学校生活へ向けての様々な準備に対してより一層実感が持てるようになっていきます。小学校への散歩は、就学先となる子どもも違う小学校に行く子どもも一緒に行くので、他の小学校の雰囲気を感じることができるとともに、友だち同士で小学校への期待や興味を高めることにつながっているようです。

保育園職員と小学校との交流として、1年に1回2月頃に、保育園の職員が小学校に訪問し、1年生の授業の様子を参観します。保育園でもひらがなの読み書きや挨拶・返事など、小学校へ就学するための準

備や意識を高めていく取り組みを進めていきますが、保育園から小学校へ移行するためのプログラムを共有していない状態では、何をどのように準備を進めていくかは模索しながら自主的に考えていかなければなりません。この様な中で、保育所職員が小学校での授業の様子や雰囲気を見学し、実際に小学校で使われている教材や小学校の教員の言葉の使い方、子どもたちの座り方や発言の仕方、教室の環境構成などを知ることで、保育園での就学前に向けたクラスの雰囲気の作り方や、子ども同士の関わりや活動に必要な以上に介入しないといった、子どもに対する保育士の関わり方に対して有効に活用されています。

（３）保育園での就学前準備

本園では、小学校との情報交換や交流などを参考に、小学校への就学に向けた準備を園内で進めています。主には、子どもが小学校へ就学したときに、授業や生活などをスムーズに移行できるようにとすることを考えています。先の、就学前の秋以降に子どもたちの小学校へ就学することの意識を高めていくことと並行して行っています。

具体的には、席の並び方や時間の区切りを小学校と近づけ、例えば45分間いすに座って集中して制作や文字の活動に取り組むことや、時計を意識しながら自主的に活動できるようにするなど、時間の感覚的習慣を身につけるようにしています。

また、ひらがななど文字の活動も、小学校で使われるノートや枠の大きさにあわせ、就学直前には自分の名前を書くことができるようにしています。

その他、あいさつや返事、みんなの前で自分の意見を発表することなど、保育園の中で小学校での授業や生活を想定しながら、様々な生活習慣などを身につけることができるように取り組んでいます。

これらの活動は、特に小学校から要望などがあったわけではなく、過去の事例や小学校との情報交換などの中から自主的に取り組んできたものです。したがって、活動の内容や取り組み方も、その時々の子どもたちの様子によって年々変化しています。



3. 次の段階に向けて

小学校との連携の重要性や必要性は感じつつも、なかなか具体的な実践へと進んでいかない中、2008年に改定された保育所保育指針によって義務化された保育所児童保育要録を一つのきっかけとして次へのステップにつながることが期待されています。

下関市では保育所児童保育要録（以下、保育要録）の様式を作成するにあたり、2009年度当初から複数の公私立保育園の職員によって約半年間数回にわたって協議を行い、下関市独自の様式を作成しました。保育所保育指針にあるとおり、保育要録は子どもの就学に際して、子どもの育ちを支える資料であるとの観点から、「子どもが保育園から小学校へとスムーズに生活の場を移行することができるために」を趣旨

として、保育園から小学校に「何を伝えるべきか」「何が伝えられるか」「どのように伝えるか」に重点を置きました。また、協議の途中の段階では、小学校の先生方にも参加していただき、下関市の保育要録の趣旨や保育園としての意図を伝達するとともに、小学校として子どものどのような情報が必要であるかも申し受け、保育要録様式の作成に反映させました。

また保育要録は、1つの小学校へ複数の保育園から集まることが想定されるため、保育要録に記載される内容や視点については、保育園間あるいは保育園の職員間で共通した認識や視点が重要であると考えました。そこで、保育要録を記載するためのマニュアルを作成するとともに、研修を行うことで共有を図るよう試みました。小学校に対しても、事前に保育要録やマニュアルを送付するとともに教職員を対象とした研修を行い、保育要録を送付する保育園と受け取る小学校とで共通の認識を持つことができるように考慮しました。

これら一連の保育要録の様式を作成するための取り組みを通して、保育園と小学校とで子どもの見方や捉え方に大きな違いがあるわけではないということが明らかになったとともに、排泄や着脱などの基本的な生活習慣や友だち同士の関わりなど、保育園としての「伝えたい子どもの様子」と小学校の「知りたい子どもの様子」が何かを共有することができたことは一つの大きな成果であったといえます。

保育要録は子どもの育ちを支える資料として保育園から小学校へ送付されるものであり、保育要録の情報などをもとに小学校では、クラス編成の参考にすることや、子どもの様子を把握することが期待されますが、保育要録で子どもが小学校へ生活の場をスムーズに移行させるためのすべての役割を果たすことができるとは考えていません。保育要録に記載されることは子どもが保育園で生活してきたことの一部に他なりませんし、記載することができる内容にも制限があるとともにすべてを記載することは不可能です。したがって、保育園を卒園した子どもが小学校に就学した後でも情報交換は必要になるでしょうし、時として保育園と小学校が連携を取りながら関わっていくことも考えられます。しかしながら、これまで保育園と小学校との間で共有することのできるものがなかったことを考慮すると、下関市全体での取り組みとして、保育要録自体や保育要録を媒介として保育園で行われている活動や保育内容を共有することができたことは重要な意味を持ち、今後の保育園と小学校との関わり方に変化をもたらすことと期待しています。

4. 保小連携への課題

本園が、前述の和田先生の連携段階で示される第三段階（互惠性のある連携・接続カリキュラムの試行段階）に進展していくにあたっては、今後いくつかの課題が想定されます。

その中で最も大きな課題となるのが、本園からの就学先となる小学校には複数の保育園や幼稚園から子どもが集まるという点です。特に接続カリキュラムの構築に関しては、このような状況下では課題になることが予測されます。保育園と小学校との間で、子どもが小学校へスムーズに生活の場を移行するための共通の継続的・段階的プログラムを共有することで、保育園での就学前準備をより効果的に展開することが可能になるかもしれません。しかしながら、複数の保育園・幼稚園と1つの小学校という関係が存在する下で、単一の保育園と小学校が個別的に接続プログラムを構築していくことは、逆に保育園間や保育園

と幼稚園との間での弊害が生じる恐れがあります。保育園や幼稚園、小学校はそれぞれの理念や方針の下に、保育や教育が実践されているため、それぞれの理念や方針を尊重しつつ、子どもの接続期を全体的に捉える必要があるといえます。そこでは、和田先生も示されているように、教育委員会などの地域として一体的に捉える事のできる機関などがコーディネートするといった介入が不可欠であると感じます。

さらに、前述の課題を解消していくためには、保育園間や保育園と幼稚園間、保育園と小学校間といった、縦横の関わりや交流・連携が不可欠であると感じます。互恵的な連携や接続カリキュラムの構築を進めていく際、連携を進めていく双方が互いの状況を把握・理解することはもちろんのこと、保育所間や保育所と幼稚園の間での就学前に向けた取り組みの格差の解消や、接続前後の保育園や幼稚園と小学校が互いにそれぞれの段差を小さくしていくことが必要であると考えます。先の保育要録は、保育所間や保育所と小学校との間の格差や段差に有効であると考えますが、今後、さらなる縦横の関わりや交流・連携が待たれるところです。

まとめ

今回、何のために、どのようにして保小連携を進めていくのかについて今一度考察しました。何のためについては、子どもが保育園から小学校へ就学する際に、授業や生活の様々な場面での保育園から小学校への段差を解消し、スムーズに生活の場を移行することができるようにすることに他なりません。当然のことながら、対象は子どもであり、保小連携はその手段の一つということです。特筆すべき保小連携の取り組みを行っているわけではない本園の事例を示すにあたって、まず初めにしたことは、日常の保育で行われている様々な活動の中から、保小連携に相当するものや、子どもが小学校に就学することへの準備として行われている活動を洗い出すことでした。意識して行われているものやそうでないものも含めて、改めて保育園での活動内容や目的を振り返ることで、子どもの就学に向けた取り組みが種々あることに気付きました。子どもが保育園から小学校へスムーズに生活の場を移行することを考えると、これまでに記した取り組みだけでは十分とはいえません。現在、本園で行われている小学校との情報交換や交流、子どもに対する就学前の準備を効果的に進め、充実させていくためには、保育園と小学校との連携をより密接にしていくことが大切であるとともに、そのために少しずつ進んでいきたいと感じました。

寺田清美研究員からのコメント

下関市は市町村合併（2005年）により、面積は東京23区以上となり、一口に連携といっても地域事情の大きな差異や保護者への多様な対応が必要とされるようになりました。このような状況の中、のあ保育園は、保育園と小学校との定期的な情報交換や交流を行っており、全国的にもっとも多い交流段階の事例といえるでしょう。

（1）保幼小連絡協議会から小学校との情報交換へ

年1回の保幼小連絡協議会に、主任保育士や年長の担当保育士が参加し、就学前の子どもについての保育園と小学校の情報交換を行っています。その中身は、相互交流・職員交流であり、子どもの生活とあそび、交友関係、家族関係など、より具体的な情報を提供することで有効に機能しています。さらに、校区外の小学校に就学するなど保幼小連絡協議会に参加できない際には、電話で子どもの様子を伝達している姿勢は、素晴らしいものです。

（2）散歩や行事の交流から子どもの意識が高まる

小学校の運動会時に、運動会のプログラムの一部に参加して行事の雰囲気を味わうことや、散歩を兼ねて小学校へ遊びに行くことは、就学に向けて期待や意欲を高める活動として、効果的です。保育園の生活やあそびの場との違いを肌で体験し、子ども自らが小学校に向けての意識が高まることで、子どもの不安解消につながることでしょう。

（3）保育者と教員の交流

保育園の職員が、小学校に行き授業の様子を参観することから、園児たちが小学校に進んだ際につける挨拶や返事、行動の仕方などをあらかじめ理解し、準備のための意識を高めています。そして、就学を見据え、子ども同士の関わりや活動に必要な以上に介入しないといった、子どもに対する保育者の関わり方に対して有効に活用されていることも参考にしましょう。

（4）公私立保育士により誕生した「保育所児童保育要録」の様式

下関市独自の様式を作成するにあたり、保育士が会議を重ね誕生したことや、市全体での取り組みとして保育活動や保育内容を共有することができたことは、高く評価できる点です。今後、保育園と小学校との新たな関わりや交流・連携にも期待できることでしょう。

1. テーマ

「ことばの力」を育む保育・教育の工夫

2. 保育園名

合志中部保育園

3. 執筆者

副園長 福嶋 義信

4. 園の紹介・特色

【所在地】 熊本県合志市豊岡311-1

【URL】 <http://www.koshi-chubu.ed.jp/index1.htm>

1962（昭和37）年、定員80名で開園。

2006（平成18）年度、合志市の次世代育成支援計画に基づき、保育室を増築。定員を120名に増員。

2009（平成21）年12月現在、園児数160名、職員数27名。



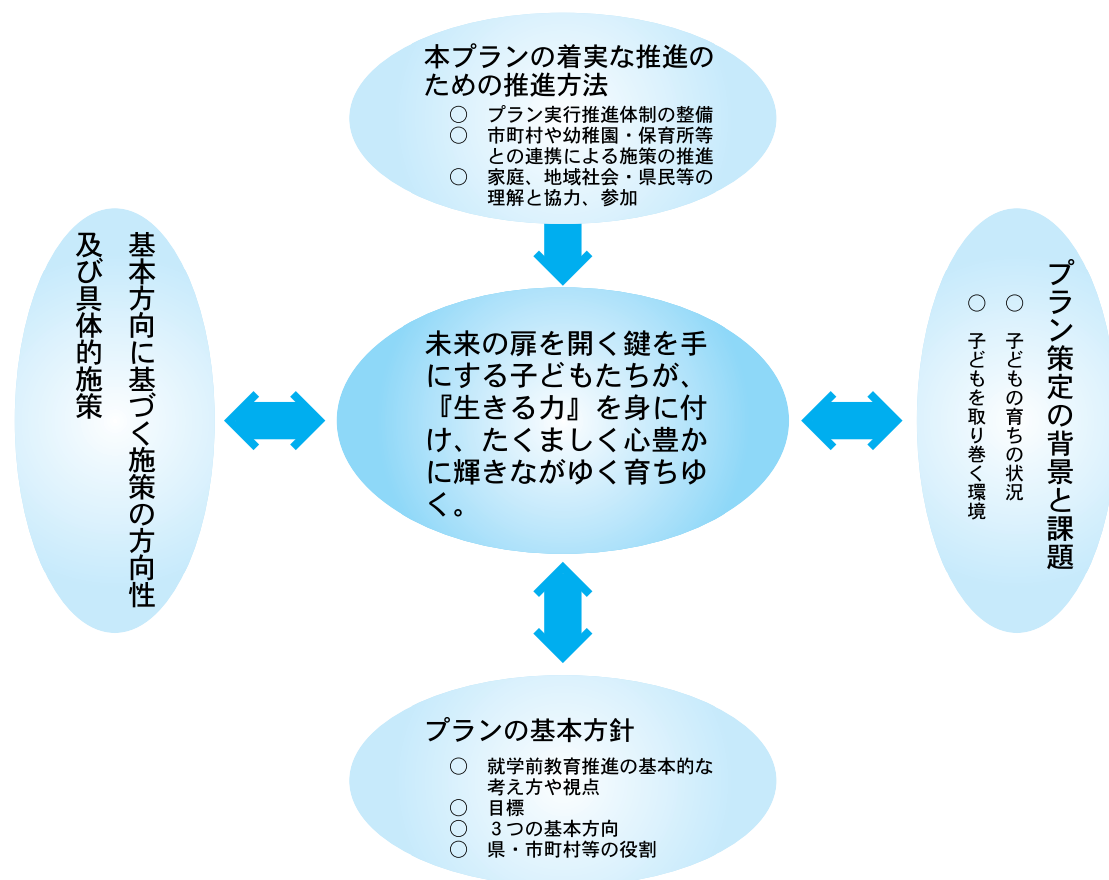
1. 合志市について

- ◇ 2006（平成18）年2月27日 合志町・西合志町が合併し、合志市となる
- ◇ 人口約54,800人（平成21年現在、増加中）
- ◇ 年間転入数が約3,300人（増加中）
- ◇ 市内の認可保育園は、現在14園（すべて私立認可保育園）
- ◇ 保育園に通っている子どもの数…約1,400人
- ◇ 幼稚園へ通っている子どもの数…約600人
- ◇ 合志市在住の幼児で、保育園または幼稚園に通園している子どもは、全乳幼児の約58%

2. 熊本県の就学前教育について

- ◇ 「肥後っ子輝きプラン」（平成15年3月策定）
- ◇ 「つなぎはぐくむ幼・保、小連携実践事例集～就学前から系統的に～」（平成19年3月）
- ◇ 「未来にかがやく肥後っ子をはぐくむために～熊本県就学前教育振興「かがやけ！肥後っ子」会議～の提言」（平成20年3月）
- ◇ 「幼・保、小、中連携ステップ」推進の手引き（平成21年3月）
- ◇ 大学と連携した接続期の研究～平成19・20年度熊本県教育委員会・合志市教育委員会指定就学前教育の振興・充実モデル実践研究 合志中部保育園・合志市立合志小学校～

(1) 「肥後っ子輝きプラン」……平成15～22年度



(2) 幼・保、小、中連携ステップ

取組機関	連携の視点	ステップ	連 携 内 容
各機関で	情報連携	ステップ 1 a	幼稚園・保育所、小学校の教員・保育士が入学前に子どもの実態を交換し合う。
		ステップ 1 b	幼稚園・保育所、小・中学校が教育・保育目標、経営案、行事、お便り等を交換し合う。
	行動連携	ステップ 2	子ども間の交流を行う。
		ステップ 3	幼稚園・保育所、小・中学校の教員・保育士が相互に教育・保育を参観し合い、事後に意見を交換し合う。
		ステップ 4	参観を通じた学びから、指導・援助方法を工夫改善する。
		ステップ 5	各校・所（園）に連携担当者を位置付け、幼・保、小、中連携の全体計画、年間指導計画を作成し、連携・交流を教育課程に位置付けるなど、計画的に実践する。
		ステップ 6	子ども間交流におけるチーム体制を明確にして取り組む。
		ステップ 7	連携推進のための組織（連絡協議会等）を作る。
各連絡協議会で	目標連携	ステップ 8	上記会議を中心に実態を調査し、地域ではぐくむ子ども像を明確にする。
		ステップ 9	目指す子ども像をはぐくむ連携カリキュラムを作成する。
		ステップ 10	子ども像の育成を目指して連携カリキュラムに沿って、地域で取り組む。

3. 本園の実践

大学と連携した接続期の研究～平成19・20年度熊本県教育委員会・合志市教育委員会指定就学前教育の振興・充実モデル実践研究 合志中部保育園・合志市立合志小学校～

①主題

「ことばの力」を育む保育・教育の工夫～円滑な「つなぎ」の充実を目指して～

②主題設定の理由

ア. 今日の課題

保育・学校教育においては、国際化や情報化等の社会変化に伴い、生涯学習の基盤を培うという観点から、生きる力を育むことが求められています。それゆえ、一人ひとりの生活背景や価値観を大切にしながら社会の一員としての責任を自覚して行動することや、互いに協調し合って行動すること（コミュニケーション能力）が一層求められています。保育園や学校は集団で学ぶところであり、さまざまな関わり合いを通して、個人が育つと共に、集団として高まっていくことを目指すことにおいて、「ことばの力」の育成は不可欠であるといえる。「人、もの、こと」から様々な情報を正しく読み取り、自分の考えを表現する力を高める学習は、生きる力を育むのに重要だと考え、本主題を設定しました。



イ. 熊本県教育委員会の「肥後っ子がやきプラン」との関連から

平成15年3月「肥後っ子がやきプラン」が策定されました。これを受けて平成20年3月には『熊本県就学前教育振興「かがやけ！肥後っ子」会議からの提言』が県教育委員会からリーフレットにして示されました。このリーフレットには、3つの提言がなされています。その具体的実践事例として「幼・保、小、中連携ステップ」（前項2－(2)）が示してありますが、その最後に提示してある目標連携の部分を本研究が担っていると考え、本主題に取り組むこととしました。

ウ. 合志中部保育園保育目標・合志小学校目標から

合志中部保育園の保育目標は、「主を愛し、人を愛し、自然を愛し、しなやかな身体と優しい心を持ち、主体的、意欲的、創造的に生きる人間としての基礎を育てる」です。

また、合志小学校の教育目標は「働き、勇気、根気を基底に据えた『心豊かな、知恵ある、健康でたくましい』子どもの育成」です。

これらのことから、本研究で園と学校の共通のめざす子ども像を以下のようにしました。

- 「人・もの・こと」と関わる子
- 自分の思いや考えを伝え、表現できる子
- たくさん読書する子

こうした、子ども像に迫るためにも、本研究主題を設定して、環境や人との関わりの中でコミュニケーション能力を育てることを目指すことにより保育目標・教育目標の具現化を達成できると考えました。

③保・幼・小接続期の基本的な考え

接続期とは、保育園・幼稚園から小学校への滑らかな接続を達成するために、年長後期から、1年生1学期までをひとまとまりの時期として捉えるために設けたものです。

本研究では、接続期を以下の3つに区分しました。その理由は、合志中部保育園では毎年10月に運動会がある。このとき、子どもたちは心身共に大きく成長します。そして、運動会を区切り子どもたちの生活も大きく変化します。そこで、運動会が終わったときから、卒園に向けてさまざまな保育活動が展開される時期を「接続前期」と捉えました。「接続中期」は、1年生の入学からゴールデンウィークまでの時期としました。この時期は、小学校生活になれるまでの一番不安定な時期です。子どもたちの気持ちへの配慮がとりわけ大切なときでもあります。小学校の学習のねらいを持ちながらも、子どもの生活を基盤とした取り組みを行う時期です。



「接続後期」は、ゴールデンウィーク明けから1学期末までとしました。子どもたちも学校生活に慣れてきて、次第に落ち着いた生活を送ることができるようになってきます。友達との関わりも多くなる反面、トラブルなども多くなります。子どもの生活から生み出される学びを大切にしながらも、小学校の学習としての特性が強まってくる時期であり、今後の小学校の生活・学習につながる基盤造りづくりの時期であると考えました。

接続期（滑らかにつなぐため三つの時期に区分）

接続前期 (5歳児10月～3月)	関わりを広め、深める。小学校生活に向け、体験の共有化を図る。
接続中期 (1年入学～G・W前)	保・幼から小学校生活へ安心して移行し、自分を表現できるようにする。
接続後期 (G・W後～夏休み前)	知への興味を耕し、自分で考え学んでいこうとする姿勢を伸ばす。

④「段差」……「価値ある段差」「負の段差」

保育園では、幼児の生活や発達、興味、関心を大切にし、「遊び」を中心として総合的にねらいを身に付けていく指導が行われている一方、小学校では教科内容や時数を規定して教科等を中心とした指導が行われるなど、校種間の違いによる「段差」があります。それぞれの持つ文化としての固有性に対して、初めて小学校に入学してくる1年生の子どもたちの中には少なからず小学校不適応状態（小1プロブレム）

となり、このことは、いわゆる「負の段差」として問題視されてきました。

そこで、研究を進めるに当たって、「段差」については、すべてをなくすのではなく、子どもの成長にとって「価値ある段差」をどのように乗り越えさせていくか、また、「負の段差」をいかに低くし、滑らかにつないでいくかという方向で取り組むことにした。

「価値ある段差」＝発達にとって意味のある段差→教育課程への位置付け

「負の段差」＝学びからの逃避など発達にとってマイナスの段差
→小学校教育の改善

◇人間関係の段差

- 親と離れて一人での登校、子どもだけの集団下校になる。
- ワンマンのスクールバスで登下校する児童もいる。
- 最上級生から最下級生になる。
- 新しい友達、新しい先生と出会う。



◇環境の段差

- 敷地の移行や施設そのものが大きくなる。学校生活では、個人用机椅子・ロッカーを持ち、管理する。

◇関わりの段差

- 援助主体から指導主体になる。
- 保育園では養護と教育が一体となっている。養護が大きなウエイトを占めている。
- 幼児期の保護者の意識や躰、環境が子どもの語彙力にも大きな違いを生んでいる。

◇学びの段差

- 遊びを通しての学びから教科等を通しての学びになる。
- 自由な活動より、指示や話を聞く時間が多くなる。
- 話し言葉（一次的言葉）から、書き言葉と話し言葉（二次的言葉）へ高まる。

◇形態の段差

- 子どもの意識や活動の流れから45分単位の校時に基づく流れになる。
- 環境を通した総合的な「分けられない指導」から、教科等ごとの「分けた指導」になる。

◇評価の段差

- 個人内評価（保育園では、個人の成長・変容）重視から絶対評価重視になる。

⑤「コミュニケーション能力」（対話力）について

保育所保育指針における第3章1(2)エ 言葉（ア）ねらい、小学校学習指導要領国語科の目標から、保育園・小学校双方において「自分の考えたことを相手に伝え、相手の思いに耳を傾け、互いに分かり合

い、つながり合う関係を築く力（対話力）」の育成を大切にしていることが分かります。。そこで、本研究では、他者との協同活動の中で新しいものを生み出すことができる行為を「能力」と考え、人と人をつなぐ力、人間関係の構築を図る力をコミュニケーション能力（対話力）と考え相手の話につないで自分の考えを出し、累積していく対話・話し合いのできる力の育成を目指し、取り組むこととしました。



⑥研究の仮説と構想

ア．研究の仮説

【仮説 1】

学年間（就学前保育・教育も含む）の段差に配慮した「ことばのカリキュラム」を作成・実践すれば、保・幼・小12年間を円滑に繋ぎ、「ことばの力」を高めることができるだろう。



【仮説 2】

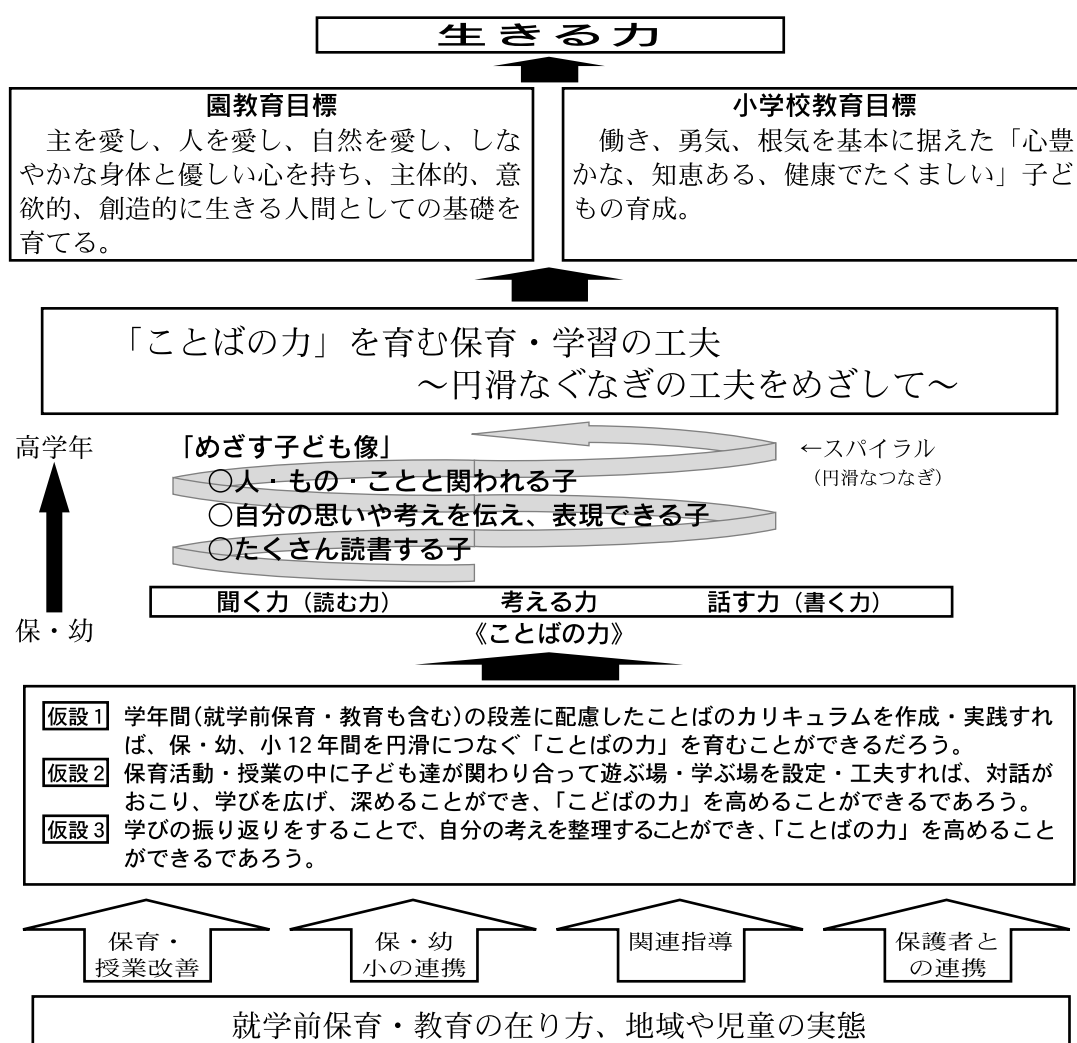
保育活動・授業の中に子どもたちが関わり合って遊ぶ場・学ぶ場を設定・工夫すれば、対話が起これ、学びを広げ、深めることができ、「ことばの力」を高めることができるであろう。

【仮説 3】

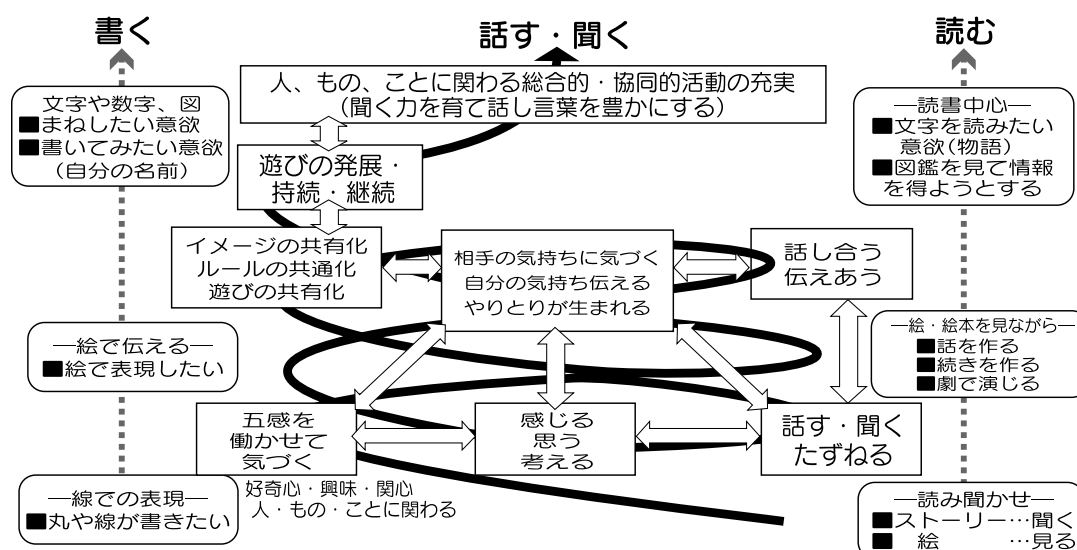
日常指導、情報連携、行動連携の充実を図れば、「人」としての育ちを滑らかにつなげ、くらし全体で「ことばの力」を高めることができるであろう。



イ. 研究の構想



就学前（接続前期）の子ども



⑦ 研究の実際……接続前期の実践

ア. 接続前期のくらし

10月に実施している運動会が、子どもたちにとって成長、発達の大きな節目になっています。運動会を境に、子どもたちは急にたくましくなり、意欲的になってきます。遊びの中で話し合って作戦を練ったり、ルールのある遊びが増えたり、ルールを作って遊ぼうとする姿が増えてきます。また、急に文字への興味・関心が高まり、遊びの中で読んだり書いたりしようとしています。そして、たくさんの行事を経験しながら、人やくらしへの関心、自然への興味・関心も一段と広がりを見せてきます。小さい子たちへのいたわりや優しい関わりもできるようになります。しかし、育ちを支える基本的習慣は自立しますが、個人差があり、部分的に不十分さが残る。

〈事 例〉

「すごーい、これ全部大根？」 T「そうだよ。」
「100本くらいあるかなあ。」「いっぱいだよ、数えられんよ。」
「この列を引かせてもらうので、こっちから順番に引いてね。」
「なかなか抜けんよ。」「長いね。」「あのおじさんすごいね。ぼんぼん抜いているよ。」
「葉っぱがちくちくするよ。」「〇〇ちゃん、手伝って。」「いいよ。」
「〇〇ちゃんも来て。」「うんとこしょ、どっこいしょ。」「まだまだ抜けんよ。」～



読み聞かせて覚えていた絵本の「大きなかぶ」の場面が自然に再現され、楽しい大根引きとなりました。帰りは、大根料理で盛り上がり、家庭での食卓風景がうかがえます。

イ. 接続前期の実践例

【活動名】 つくって遊ぼう（グループや積み木でカブラ（kapla）を使って制作に取り組む）

【ねらい】 友達に自分の意見を伝えたり、相手の意見を聞いたりしながら、力を合わせて一つの作品を作る楽しさ・面白さ・難しさを体験する。

【保育の視点】

友達の作品に興味を持って聞いてみたり、自分たちが作った物の工夫したところを相手に伝えたりする嬉しさ・難しさを体験する。活動を通して相手の気持ちに気づき、折り合いを付けることを学ぶ。

【保育の実際】

環境構成	子どもの様子や反応	保育士の援助及び配慮
導入 - 生活グループで活動する。 - 広くスペースを確保し、大まかに各グループの製作場所を決める。 【場所：遊戯室】	- 保育士の説明を聞き、約束事をみんなで確認し合う。 - 約束事を積極的に発言する子ども 「投げたらダメ」「独り占めしないでみんなで使う」「走ったら作ってるのが壊れるからダメだよ」 - 友達の言葉にうなずいたり賛同する子ども 「うん、うん」「そうだよ。壊れるけんダメだよ」「みんなで仲良く使わなんよ」「貸してって言わなんよ」	- 活動の内容を説明し、カプラや積み木を使う際の安全面と独占しないでみんなで使うことを、子どもたちから言葉を引き出し、復唱する形で伝えていく。 - 各グループの制作場所に目印の札を立てる。 - 最後に作品を見せ合う場面を設定していることを伝え、製作意欲が高まるようにする。
活動（話し合い）	- かごにあらかじめカプラや積み木をセットしておく。 - グループ毎に分かれ「何を作るか」「役割分担」などを相談する。 - 何を作るかすぐに決まるグループ 「お城作ろう」「いいねえ」 - なかなか意見がまとまらないグループ 「飛行場と街を作ろう」 「えーっ、私キリンがいい」 「じゃあ、〇〇ちゃんはキリン作って。」 「僕たち街作るけん」 「えーっ、後から手伝うけん……」	- なかなか作るものが決まらないグループに入り、それぞれの意見を聞き、相手に伝えながら子どもたちと一緒に考えをまとめていく。 - 様子を見て、別のアイデアや折衷案などをそっと伝えてみる。
	 - 作るものが決まったグループから積み木やカプラを取りに行き、製作活動始める。 - 一人で作ったり、友達と一緒に作ったりする。 「〇〇ちゃん、見て。できたよ」 「すごいねえ」「ここにカプラ置いたら？」 「うん」「ねえねえ、つなげよう」 - どこに何を置くかなど、友達と話し合った後、重ね方を教え合ったりする。 「これ見て。ここが開くんだよ」 「すごい。どうやって作ると？」 「こうすると」「ここに何置く？」 - 意見の違いでトラブルになるグループ 「□□くん、そこに置かんで！長くするとだけん」 「えーっ、だってここに置きたいもん」 「ダメ、あっちに置いてよ」 - 役割分担しながら作るグループ 「おれ、ここするけん〇〇ちゃんは階段作って」「いいよ。」	- 子どもたちの製作活動を見守り、「うわあ、すごいね」「これはカッコいいね」など工夫や頑張りを認めるような言葉かけをしていくことで、さらに意欲が高まるようにする。 - 作り方、重ね方等で困っている子どもの側へ行き、友達に相談してみるよう促す。また必要に応じて、保育士がそっと周りの友達に困っている子どものことを伝えることで、子ども同士の伝え合い、助け合いの拡がりを促す。 「うわあ、ここに飛行場ができてるよ」「何か動物いるよ。何かなあ？」「すごいお城ができたねえ」など、途中経過を知らせることで、他の作品にも興味を持てるようにする。

ま と め	*活動スペースが広いので、ワイヤレスマイクを準備する。	・自分たちで作ったものをみんなで見せ合い、発表し合う。 「お城を作りました」「キリンもいるよ」 ・工夫したところも伝え合う。 「ここから入ったら、これが開くよ」 「えーっ、見せてー」「これは回るよ」 	・子どもたちが工夫したところなどを聞き出したり、「すごいねー」「本当、回るよね」など、子どもから出た言葉を伝えることで認め合ったり、友達の工夫、頑張りに気付くことができるようにする。 ・次回への期待がさらに高まるような、言葉かけをする。
-------------	------------------------------------	---	--

【成果と課題】

- 話し合い時、自分の意見を伝えたり、相手の意見を聞いたりすることが、以前に比べて、随分スムーズにできるようになった。
- 保育士が間に入らなくても、グループに“まとめ役”的存在の子どもがいるので、他の友達の意見をうまくまとめ、自分たちで折衷案等も出して折り合いをつけることができるようになってきた。
- 保育士が子どもの工夫等をさりげなく聞き出し、みんなに伝えることで活動に拡がりが見られた。
- 作品の中には回転寿司屋など生活体験を再現するものなどがあり、子どもたちの生活体験を知る機会となった。
- 約30分で話し合いを行い製作をするのは、なかなか難しいところがあった。話し合いの時間を別の日に事前に設け、じっくり話し合ったうえで製作に取り組んでもよかったのではないかと感じた。
- 製作に入ると夢中になって次々とアイデアが浮かんできて複雑になっていき、話し合いながらの共同作業をするというより、リーダー的な子どもの独壇場になってしまうグループもあった。
- 今回は子どもたちに何を作ってもよいと任せたが、ある程度の範囲・設定を縛った方が限られた時間の中ではやりやすかったのではないかと思った。

⑧研究の成果

- 保育園と小学校の「ことばの力」の発達を1つの図にまとめたことで、つながりが明確になった。また、「ことばの力」を育むカリキュラムを作成したことで、段階的な「ことばの力」の育成を保育、授業の中で取り組むことができた。
- すぐに保育士や教師が指示するのではなく「どうすればいいかな」「それで」「それから」など子どもに返すような言葉かけを多くすることで、子どもたちが自分たちで考えはじめ、自分で友達に伝えたり、仲裁に入ったりする姿が多くなった。
- 保育士・教師が互いの日課を知り、就学前と入学後の子どもたちの様子を観察することで自分たちの

課題が見え、いろいろな段差を滑らかにする工夫ができた。

- 当番活動やそうじなどは、自分たちだけで行うことにより、接続前期での力の高まりをスムーズにつなげることができた。

⑨今後の課題

作成した「ことばのカリキュラム」で、保育園と学校の段差だけでなく、それぞれの園の特色を生かしながらも共通体験を増やす必要がある。

対話力の育成には、子どもたちの生活に直接関係したテーマの方が熱心に対話活動が繰り広げられた。くらしの中での対話力を保育活動や授業の中でどう活用するか更なる工夫が必要である。

松寄洋子研究員からのコメント

合志中部保育園は、平成19～20年度に県教育委員会と市教育委員会の指定を受け、連携に取り組みました。ミッション系の私立保育園と公立小学校との連携に、現場でははじめ戸惑いもあったようですが、同じ地域にある施設・学校として、保育所と小学校がすべての子どもを見守りながら育てていくという姿勢が一貫して感じられます。

(1) 就学前から中学校までの連携における位置づけ

熊本県は、「幼・保、小、中連携ステップ」を作成しており、交流や情報交換、計画的な連携の実践を行っています。乳幼児期から児童期もその一部として位置づけられているため、子どもの発達の見通しが持ちやすく、「接続前期」「接続中期」「接続後期」各段階での目標や内容を具体的に考えることが容易になっています。

(2) 大学との連携

連携の取り組みを当事者だけでなく、大学という第三者の存在により、子どもたちの様子をより客観的に捉えています。仮説を立て、実践後にVTR視聴のカンファレンスを行い、カリキュラムを作成するという一連の過程は、どの園でも実践できることではありませんが、得られた成果である子どもの発話や行動をとらえる視点を参考にすることができます。

(3) 「ことばの力」を中心とした連携

学びの接続において、「領域」から「教科」への移行を促す働きかけを明らかにすることは難しいことですが、ここでは〈ことばの力〉という観点からコミュニケーション能力（対話力）の育成を目指しています。単に1つの領域と1つの教科の接続にとどまらず、子どもの全体的な発達の接続になっているといえるでしょう。

【資料】合志小学校校区就学前・小学校連携『そだちのステップ』

合志小学校校区就学前・小学校連携（栄保育園・合志中部保育園・竹迫みのり保育園・合志小学校）

そ だ ち の ス テ ッ プ								
		0～2歳児	3・4歳児	5歳児		小：低学年	小：中学年	小：高学年
あいさつ	返事	保育者に名前を呼ばれたら「はい」と返事をしようとする。	保育者に名前を呼ばれたら「はい」と返事ができる。	保育者や友達に呼びかけられたら、「はい」と返事ができる。		相手を見てはっきり「はい」と返事できる。	相手を見て「はい」と「いいえ」を話の内容を理解して返事することができる。	相手を見て、話の内容を判断し、的確な返事ができる。
	あいさつ	親しい人にあいさつされるとあいさつを返そうとする。	周囲の人にあいさつされると、その意味がわかり、あいさつを返すことができる。	場面に応じたあいさつのことばを知り、親しみを持ってあいさつすることができる。		相手を見て、笑顔であいさつすることができる。	相手を見て、自分から進んであいさつすることができる。	相手を見て、時と場に合わせて、大きな声や小さな声であいさつすることができる。
話す・聞く	聞く	保育者の話に親しみを持って耳を傾ける。	保育者や友達の話に、親しみを持って耳を傾ける。	話している人に注目して最後まで話を聞く。		相手を見て、最後まで話を聞くことができる。	話し手を見て、うなづきながら、最後まで話を聞くことができる。	相手を見て、うなづきながら自分の考えを持ち、話を聞くことができる。
	話す	保育者や友達に親しみを持って話しかける。	周囲の人に生活に必要な話をしようとする。	周囲の人に生活に必要な話をすることができる。		自分の気持ちや考えを「～です。」「～ます。」まできちんと話すことができる。	伝えたいことを自分のことばで話すことができる。	相手に合わせて、声の大きさや、内容を考えて話すことができる。
遊び・一人遊び	遊び	一人で楽しく遊ぶことができる。	ルールに気付き楽しく遊ぼうとする。	ルールを守りながら楽しく遊ぶことができる。	予習復習	宿題や明日の準備を家の人に言われないでできる。	宿題や、今学習していることの練習ができる。	宿題や復習を30分以上できる。
		※一人で学ぶ力の基礎となること ○早寝早起きの生活リズムを作ることができる ○3度の食事が規則正しく取れる ○絵本に親しむことができる ○後始末が一人で行える			自主学習	自分の興味あることを進んで練習する。	今学習していることや興味あることについて、家でも学習しようとする。	今学習していることや興味あることについて、家でも学習しようとする。
家庭学習目標時間						1年生－20分 2年生－30分	3年生－40分 4年生－50分	5年生－60分 6年生－70分

合志小学校校区就学前・小学校連携（竹迫みのり保育園・栄保育園・合志中部保育園・合志小学校）

そだちのステップ								
年齢区分		おおむね 0歳	おおむね 1歳	おおむね 2歳	おおむね 3歳	おおむね 4歳	おおむね 5歳	おおむね 6歳
あいさつ	返事	保育者や親しい人に名前を呼ばれたら、振り向いたり笑って応えたりする。	保育者や親しい人に名前を呼ばれたら、手を挙げたり「はい」と返事をしようとする。	保育者に名前を呼ばれたら「はい」と返事が出来る。	保育者に名前を呼ばれたら、はっきりと「はい」と返事が出来る。	保育者に名前を呼ばれたら、相手を見てはっきり「はい」と返事が出来る。	保育者に名前を呼ばれたら、相手を見て「はい」や「なあに」など返事が出来る。	保育者に名前を呼びかけられたら、相手を見て程良い声で相応の返事が出来る。
	あいさつ	相手を模倣しながら声をだそうとする。	あいさつされると仕草や言葉であいさつを返そうとする。	あいさつされるとあいさつを返すことが出来る。	あいさつの言葉を自分から使うようになり、言葉を使う心地よさを体験する。	あいさつされるとその意味が分かり、あいさつを返すことが出来る。	場面や状況に応じたあいさつの言葉を知り、親しみを持ってあいさつすることができる。	場面や状況に応じたあいさつが自分から出来る。
聞く	聞く	保育者や親しい人の話しかけに気付き耳を傾ける。	保育者や親しい人の話に親しみを持って聞こうとする。簡単な言葉が分かる。	保育者の話に親しみを持って耳を傾ける。 絵本の読み聞かせを喜んで聞く。	保育者や友達の話に親しみを持って聞く。 簡単なストーリーが分かるようになり、絵本の読み聞かせを喜びイメージを広げる。	興味のあることに関して注目して最後まで話を聞くことが出来る。	話している人に注目して、最後まで話を聞くことが出来る。	話している人に注目して最後まで話を聞き、内容が理解出来る。 質問したり、感想を言ったりすることが出来る。
	話す	保育者や親しい人に親しみを持って様々な発声をする。 喃語が出る。	自分の意志や欲求を喃語や身振りで伝えようとする。 一語文を話す。	発声が明瞭になり、言葉が著しく増加する。 自分の意志や欲求を言葉で伝えることが出来る。	日常生活での言葉のやりとりが出来るようになる。 「なぜ」「どうして」等の質問が盛んになる。	日常生活での言葉のやりとりが不自由なく出来るようになる。	楽しんで会話する。 理由付けて話すことが出来る。	順序立てて話をすることが出来る。 楽しんで会話する。 遊びの中で共感したり、意見を言い合ったり、調整したり、合意したり出来るようになる。
遊び		親しい人にあやしてもらいの喜び。 一人遊びを楽しむ。	友達の遊びに関心をもち一緒に遊ぼうとする、物をやりとりしたり、取り合ったりする。	友達と関わりながら楽しく遊ぶことが出来る。 簡単なごっこ遊びをする。	友達と関わりながら楽しく遊ぶことが出来る。 おとなの行動や経験したことをごっこ遊びに取り入れたりする。 簡単なルールを知り、意識しながら遊ぶ。	様々なイメージを広げ友達とイメージを共有しながらごっこ遊びを楽しむ。 自然や物と関わり、全身を使って遊ぶ。 仲間遊びが豊かになる中で、自己主張をぶつけ合い葛藤を体験する。	遊びの中で自己主張しながらも、友達の思いも少しずつ受け入れられるようになる。 ルールの大切さに気付き、守って遊ぶ。 文字への関心が出てくる。	役割を担って、協同遊びやごっこ遊びを満足するまでやろうとする。 ルールを作って遊ぶようにする。 文字への興味・関心が深まり、簡単な言葉を読んだり書いたり、手紙をやりとりして遊ぶ。
基本的 生活習慣	食事 排泄 睡眠 衣服の着脱 身辺処理	介助を受ける。 食事を手づかみで食べようとする。 自分の物と友達の物の区別が付き始める。	食事を自分で食べる。 尿意を知らせようとする。 トイレで出来るようになる。 自分と友達の持ち物の区別が出来る。	食事、衣服の着脱など、身の回りのことを自分でしようとする。 排泄の自立が進む。 促されて遊具や持ち物を片付けようとする。	食事、排泄、衣服の着脱などがほぼ自立出来るようになる。 自分の持ち物を愛着を持って使ったり整理したりする。	食事、排泄、衣服の着脱などが自立する。	基本的な生活習慣が身に付く。	基本的な生活習慣が身に付き、自立し、必要に応じてある程度、自分で調節・調整出来るようになる。

【資料】平成20年度合志中部保育園・合志小学校研究・研修

月	日	合志小学校 校内研究		合志中部保育園 園内研修
4	9 16 18	年間研修計画立案 接続中期 1年生「はる」の授業研究、 研究の方向性の共通認識 全体会（各部会の研修計画・相互理解）	5/13	○大学と連携した接続期の研究について ・研究の確認→指定市町村、研究内容、研究主題、保育園における“生きる力”、連携ステップ ○改定保育所保育指針について
5	14 21	テーマ研・組織、部会での活動計画 1年授業研「はなのみち」	5/20	○大学と連携した接続期の研究について ・年間計画と実践記録 ・「乳幼児（プチ）ことば遊び集」 ○研修報告～新任保育士研修～ ○県栄養士会福祉栄養士協議会総会報告 ○研修報告～子育てネット講演会“食育” ○市園長会報告
			5/27	○大学と連携した接続期の研究について ・保育の実践記録（保育所保育指針の改定も含む） →小学校との接続 ・小学校から望む子ども ○研修報告 乳児保育研修、カウンセリング研修、児童虐待発生予防研修、発達障害のある子どもの対応と保護者支援 ○園児の情報交換
6	4 11 18 19	4年授業研「伝言はまちがえずに」 1年授業研「おばさんとおばあさん」 6年授業研「学級討論会をしよう」 1年授業研「国語図をつかってかこう」		
7	2 9	3年授業研「道あんないをしよう」 5年授業研「千年のくぎにいとむ」	7/29	○大学と連携した接続期の研究について ・年間計画 ・他保育園との交流 ○研修報告 保育所保育指針
8		保育実習（合志中部保育園）・保育参観（合志中部保育園） 紀要・資料・要項作成提案、作成 全体会・部会研		
9	10 17	紀要添削、印刷 県教委・進捗状況視察 1年授業研	9/2	○改定保育所保育指針について ・研修報告「今、保育の在り方を問う～指針 改訂、世界の動向、日本の現状の中で～」 ・改定保育所保育指針に基づく“児童要録”作成について
10	8 29	協力者へ授業提案 →各学年部で（10月～11月） 研究発表会指導案作り	10/14 10/23	○保育年度後半の保育行事について ○大学と連携した接続期の研究について ・「ことば遊び」年間計画の作成 ○園児の情報交換 ○研修報告 乳児保育研修、児童虐待について ○園児の情報交換 ○大学と連携した接続期の研究について ・「ことば遊び」年間計画の作成 ・さくら組藤田先生との交流、保育活動について
11	19 26	部会研 2年授業研	11/4 11/18	○園行事の計画 子育てふれあい広場、誕生会＋クッキング、幼児祝福式、その他 ○園児の情報交換 ○研修報告 危機管理研修 ○祝クリスマス生活発表会について ○大学と連携した接続期の研究について ・公開保育 ・「ことば遊び」年間計画の作成 ○園児の情報交換
12	10 17	論文作成 指導案印刷	12/19	○大学と連携した接続期の研究について ・公開保育事後検討会
1	21 27 28	発表会準備 研究発表会 研究発表会反省会	12/22	○大学と連携した接続期の研究について ・研究発表時の保育活動について

国語科 接続前期 指導計画(円滑な「つなぎ」の充実を目ざして)

月	日	保育のねらい		内容	環境構成	予想される子どもの活動	対話の質を意識した保育士のかかわり	評価	事例
		ねらい	内容						
10月	10月	保育のねらい	運動会	運動会	園庭の安全をはかる。 ・できるだけ広い園庭が使えるようにしておく。 ・遊具の安全点検・整備。 ・子どもたちの体調把握、疲労度など考慮して進める。 ・リレーなどチーム科目を取り入れる。	・鼓笛隊・道旗（身体表現）・かけっこ・リレー等を楽しむ。 ・運動あそびや遊具を使った遊びを通して、自分の意見や考えを伝えながら、友だちと積極的に遊ぶようになる。 ・目標を持って、自分の力を発揮しながら、友だちと協力して遊びや活動に取り組む姿が見られる。 ・嬉しさや、楽しさ、など感情を体験する。 ・陣出しにこだわりラブラが起こることもあるが、自分たちで解決しようとする姿も見られる。 ・自然に勝れ、開放感を味わう。 ・地域の友だちと出会い、挨拶を交わす。 ・作物の育ちに気づき、収穫を楽しむに。赤とんぼなど季節の動を口ずさむ。	◎子どもの話を「聞く」ことを意識する。 ・生活や遊びの中で言葉の充実に回り、自分の言葉を自分の思いや考えを伝えるようになり、言葉の大切さを知らせていく。 ・練習の中で、グループ構成に配慮し、かかわりが深まるように図る。 ・走る順番などは、グループで自由に話し合うように促す。 ・保育士が率先して挨拶してみせ、みんなでも元気に挨拶できるようにする。	・「体育大会」友だちと声を合わせて応援したり、集団の一員。 ・「みんなに知らせたいこと」話の順序を考えながら、友だちに分かるように話す。「しらせたいな、みせたいな」言葉に体育大会の招待状を書いて知らせたいことを断片よく話す。	
11月	11月	保育のねらい	運動会	運動会	園庭の安全をはかる。 ・できるだけ広い園庭が使えるようにしておく。 ・遊具の安全点検・整備。 ・子どもたちの体調把握、疲労度など考慮して進める。 ・リレーなどチーム科目を取り入れる。	・鼓笛隊・道旗（身体表現）・かけっこ・リレー等を楽しむ。 ・運動あそびや遊具を使った遊びを通して、自分の意見や考えを伝えながら、友だちと積極的に遊ぶようになる。 ・目標を持って、自分の力を発揮しながら、友だちと協力して遊びや活動に取り組む姿が見られる。 ・嬉しさや、楽しさ、など感情を体験する。 ・陣出しにこだわりラブラが起こることもあるが、自分たちで解決しようとする姿も見られる。 ・自然に勝れ、開放感を味わう。 ・地域の友だちと出会い、挨拶を交わす。 ・作物の育ちに気づき、収穫を楽しむに。赤とんぼなど季節の動を口ずさむ。	◎子どもの話を「聞く」ことを意識する。 ・生活や遊びの中で言葉の充実に回り、自分の言葉を自分の思いや考えを伝えるようになり、言葉の大切さを知らせていく。 ・練習の中で、グループ構成に配慮し、かかわりが深まるように図る。 ・走る順番などは、グループで自由に話し合うように促す。 ・保育士が率先して挨拶してみせ、みんなでも元気に挨拶できるようにする。	・「体育大会」友だちと声を合わせて応援したり、集団の一員。 ・「みんなに知らせたいこと」話の順序を考えながら、友だちに分かるように話す。「しらせたいな、みせたいな」言葉に体育大会の招待状を書いて知らせたいことを断片よく話す。	
12月	12月	保育のねらい	運動会	運動会	園庭の安全をはかる。 ・できるだけ広い園庭が使えるようにしておく。 ・遊具の安全点検・整備。 ・子どもたちの体調把握、疲労度など考慮して進める。 ・リレーなどチーム科目を取り入れる。	・鼓笛隊・道旗（身体表現）・かけっこ・リレー等を楽しむ。 ・運動あそびや遊具を使った遊びを通して、自分の意見や考えを伝えながら、友だちと積極的に遊ぶようになる。 ・目標を持って、自分の力を発揮しながら、友だちと協力して遊びや活動に取り組む姿が見られる。 ・嬉しさや、楽しさ、など感情を体験する。 ・陣出しにこだわりラブラが起こることもあるが、自分たちで解決しようとする姿も見られる。 ・自然に勝れ、開放感を味わう。 ・地域の友だちと出会い、挨拶を交わす。 ・作物の育ちに気づき、収穫を楽しむに。赤とんぼなど季節の動を口ずさむ。	◎子どもの話を「聞く」ことを意識する。 ・生活や遊びの中で言葉の充実に回り、自分の言葉を自分の思いや考えを伝えるようになり、言葉の大切さを知らせていく。 ・練習の中で、グループ構成に配慮し、かかわりが深まるように図る。 ・走る順番などは、グループで自由に話し合うように促す。 ・保育士が率先して挨拶してみせ、みんなでも元気に挨拶できるようにする。	・「体育大会」友だちと声を合わせて応援したり、集団の一員。 ・「みんなに知らせたいこと」話の順序を考えながら、友だちに分かるように話す。「しらせたいな、みせたいな」言葉に体育大会の招待状を書いて知らせたいことを断片よく話す。	

国語科 接続前期 指導計画(円滑な「つなが」の充実を目ざして)

月	主 題	保 育 年 主 題「自分を生きる」		環境構成	予想される子どもの活動	対話の育ちを意図した保育士のかかわり	評 価	小学校とのつながり	事例
		内 容	内 容						
1月	と	遊びの中で、文字や数値に関心を持った り、手紙を書いたりする。	たこあげ、かるた、こまごころく、福笑い おはしき、あやとり、お正月等伝承遊びが できるように用意する。	・お正月の遊びに興味、関心を持ち、友だちと 楽しい合って遊びを楽しむ。	・お正月の遊びでは、ルールを知ること、守ることの大切さ に気づく。 ・互いに持ち寄ったルールを共有しながら、一緒に遊ぶ楽し さが味わえるようにしていく。	・遊びの中のルールを守ることが できる。 ・友だちの意見を聞き、折り合 いをつけようとする。 ・楽しく参加している。		・「あつまれふゆのこぼし」唐や文の続き方に注 意して、カルタの文を書き、グループで言葉の やり取りを楽しむ。	「わたしは、なんだろう分らないことや詳しく く聞きたいことを尋ねたり、それに答えたりす る。
		・友達の名前を認め、「決まり」「約束」 「カルタ」など自創しながらものごとに取り 組んでいく。		・運動遊びやゲーム等からだを使った遊びを通 して、自分の意見や考えを伝えながら、友だち と積極的に遊ぶ。 ・目標を持って自分の力を発揮しながら、友だ ちと協力して遊びや活動に取り組む。友だちと 楽しむ。	・学習クラブや年中組など、異年齢と合同で遊ぶ機会を作 り、各々の力を思い思いに遊びを広げる。 ・お正月休みの体験を話し合う場を設ける。・お正月や餅 つきなどを題材にして絵本や、歌を一緒に楽しむ。				
		・もちつき	・家庭や地域の方を迎えて、餅つきを体 験する。	・餅つきをする。 ・餅つきの様子を観、言葉にする。つく 体験と、えぬる、食べる体験をよめる。	・各々の頑張りを認め、励ます。 ・スナート遊びのおもしろさ、楽しさ、難しさを話し合う。	・楽しく参加している。			
2月	し	・言葉を増やし、言葉遊びのおもしろさに気 づきお話を創作を楽しむ。	・子どもたちがお話を作りやすいように、 繰り返しがあったり、リズムが良いため本を選 んで、読み聞かせの参考事例とする。	・保護者の参加を喜んで頑張ろうとする。 ・3日目は大活躍できるようにする。	・各グループの進み具合を把握し、共感や励まして、アドバ イスやヒントを出す。			・「ものなまえ・おみせやさんごっこ」をしよう品 物カードやお金、キャッチフレーズ作りなど、2 ～3人で協同して店の準備をする。客と店の人 になって売り買い(1対1)の伝え合いをする。	
		・「イースター」の意味を知る。 ・寒さに負けず走り、体力をつくる。	・様々な素材を準備する。	・いろいろな素材を使っで、自分で考え工夫し ながら製作に取り組む。 ・力を合わせて協同作品づくりに取り組む。	・子どもたち一人ひとりがイメージを膨らませ、自分で満足 できる作品を作ることができるよう援助する。 ・お互いに相手の立場を認め合いながら、協力し合っで表 現することの喜びを覚えることができるようにする。 ・進み具合を聞きながら、それぞれ必要な援助をしていく。 ・一人一人のイメージを大切にしながら言葉かけを心がける。 ・共同作品の製作では、次分な話し合いができるように時 間をとり、夏守り、一緒に考える。	・作品づくりに楽しんで取り組 む。 ・協力ができる。 ・最後まで頑張ろうとする。 ・イメージを膨らませ作品に自 分を出す。			
		・友達と共通の話題について話し合う中 で、自分の意見を言葉で分かりやすく伝え たり、友達の話の趣を聞くことができる。	・対面の準備づくりをする。 ・あやとり、おはしき、けん玉 等伝統的遊び道具を準備 する。 ・新しい遊びの準備もしておく。 ・おやつを準備する。	・祖父の出席を聞き、体験をする。 ・昔遊びを覚えてもらった一緒にする。 ・新しい遊びを祖父に教えてあげる。 ・祖父から願いを話してもらい、思いに気付 く。 ・ありがとうを伝える。	・楽しく穏やかな雰囲気作りで配座する。 ・祖父の出席に感謝の気持ちで伝える。	・ありがとうの気持ちが伝えられ る。		・「学習発表会」にこれまでの学習の成果を全校 児童や保護者の方に観てもらおう。たくさんの人 の前で大きな声で発表する。	
3月	感	・自分で準備した物・ストーリー等を考え、自 分だけのオリジナル絵本作りする。	・白いページの紙を各自に準備する。	・次々にお話を進めていくことができる子どもも いれば、なかなか進まない子どももいる。	・子どもの自由な発想、思いつきを大切にし、イメージを膨 らませやすいような言葉かけや対応を心がける。 ・それぞれに発想の刺激を待つ。	・自分なりのお話がつくれ、大 切に伝える。 ・自分なりで就学への自覚が持 てる。			3
		・いろいろな体験や行事を通して自信を持 ち、就学への期待を膨らませる。	・異年齢で合同で「動物博物館」へ行く。 ・安全に観察する。	・動物博物館を見、喜んで友だちと会話をはず む。 ・乗り物体験をする。 ・乗り物体験を聞き、何に楽しんでいるかと相談 する。 ・就学に向けて目標を持ち、意欲的に活動に参 加する姿が現れる。 ・不安を言っている子どももいる。	・空図・就学に向けて期待する反面、不安な気持ちになっ ている子どもの気持ちを受け止め、安定した気持ちで通 せるように配慮する。 ・1人あるいは少人数で就学する子どもは、不安を抱きや すいので、特に配慮する。	・周りの人に感謝の気持ちがあ り、あきらめず。			
		・卒業記念作 品展 ・卒業式							